日 本 生 物 学 会 誌

第 34 号

日 本 生 物 学 会

1994年11月15日

もくじ

小野喜三郎：夢のような話ーー是非２１世紀に実現を・・・・・1361

〇〇〇郎：ある大学院生のひとりごと・・・　・・・・・・・・1363

渡辺　緯：　の風景・・・・・・・・　・・・・・1367

奥野良之助：北朝鮮とアメリカと、どちらが怖い？・・・・・・1372

奥野良之助：「銃は禁止されてもナイフがあるよ」
「銃の規制」でアメリカから殺人事件はなくなるか・・1378

奥野良之助：意思と能力ー二つそろえば「核武装」・・・・・・1381

【新聞記事から】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1388

《編集局だより》　・・・・・1390

会計報告（1993年4月～1994年3月）　・・・・・1403

夢のような話－－是非２１世紀に実現を

小野喜三郎

生物が生きている限り体内で発生するＣＯ２は、放出しても草木が営む光合成に必要な材料として利用してもらえると期待するとしても、人間の営みに伴って生じるＣＯ２とＮＯＸは何とかしないと、地球に住んでいる生物の生存をおびやかし兼ねないと思われる。

程よい日射しと、折りおり見舞ってくれるめぐみの雨ほど、われわれをのんびりと落ちつかせてくれるものはない。

生きもの－－細菌のような微生物・植物・動物－－は、地球を包む豊富な空気と水を享有しながら、気が遠くなるほど遠い遠い昔に、簡単な生物らしい微小な自然物となり、変り変って、おびただしい多くの仲間として増え、われわれヒトもおそまきながら現れたのである。

われわれは恵まれた知恵のおかげで、生物体－－その主要な材料物質である有機物－－を燃やして火を利用し、やがて熱を力にかえて、大きな仕事（とは言っても自然現象に比べたら小さい小さい）を営みはじめ、急速に人口を増し、広く地球上に好きほうだいな、わがままな生活をしてきた。その結果、自分達も含めてあらゆる生物にとって好ましくない状態をひきおこしてきたので、やっと近頃になって、地球にやさしい環境を、など言いはじめている。

ところで、近頃、生態・生態学・環境などなど、多くの人達がよく言うようになっているが、そもそも生態学（エコロジー）という学問を提唱したのは１９世紀末のドイツでヘッケルという大学者が、生物個体の生活をみていて、個体を取りかこんでいる世界との関係を調べる必要性に気付いて、エコロギーと命名した学問を唱えたのにはじまる。彼は、生物個体－－小は微生物ひとつひとつから、人間の個人まで－－をとりかこむものを環境とよび、生物個体と、大気または水のような媒質（メディア）とその性質との関係や、他の個体（同じ種もちがう種の個体も）との関係を取り上げたのである。

ついでに気になることを言っておくと、自然という言葉をわれわれ人間やその作ったもの、すなわち人工以外のものを現すのによく用いられているが、人間自身も自然物なのだから、当然自然に対立してるかのように思うのはおかしい。以前には、それに対して天然という言葉が使われていたのだが、いつの間にか変なことになっている。

前置きが長くなってごめんなさい。

問題を、有機物（石油や石炭）の燃焼に伴う大気汚染をできるだけ少なくして、永く住みよい世界にしたいという望みに置くとしよう。それを、生物学を学ぶものとして考えてみる。近頃、と言っても、私の年齢が年齢だから、ずいぶん前の近頃だが、分子生物学という分科が開けて、それまで分からなかった精密な理解が進んだ。現在生存しているほとんどの生物は、生命現象を営むには、絶えず仕事をしていなければならない。したがって仕事をするためのエネルギーを必ず必要とする。そのエネルギーは、生体内ではＡＴＰ（

アデノシン３リン酸）という有機物が分解して、リン酸をはずしてＡＤＰ（アデノシン２リン酸）になるときに発生するエネルギーが、広く使われていることが分かった。絶えず使われるＡＴＰをおぎなうために、ＡＤＰにまたリン酸をひっつけてＡＴＰを合成しておくのである。

ところで、体内（多細胞生物－－すなわち草木や動物などでは細胞内）で、有機物（脂肪酸など）から脱した水素と体外から入ってきた（分圧のちがいで、ひとりでに拡散移動してきた）酸素とが化合して発生する大きなエネルギー（爆鳴ガス反応《古いねー－会長》で水を生じるときと同じ大きさ）を、生体内の微妙なしくみで利用して、ＡＴＰを大量に合成しているのである。（詳しくは細胞呼吸を勉強すること《わが会員にはいないだろうけどー－会長》）

ところで有機物は、草木などが日光などを吸収して水分子を分解して酸素と水素にし、ＡＴＰも合成する。葉緑体内で二酸化炭素と水素などをとりこみ、ＡＴＰを利用して、有機物を必要なだけ合成して身体を作り、呼吸の材料にも利用している。

そこで、生体内のエネルギーの変換に教えられて、私は地球に豊富な水とふりそそぐ日光を利用して、大気汚染を伴わないエンジンとその燃料についてのべることにする。

まず、日光を電気に変える（たとえば太陽電池など）。その電気で水を分解して酸素と水素をつくり、爆鳴ガス混合物を少量ずつ、シリンダー（丈夫なものを開発しなければならない）内で電気火花で爆発させピストンを動かせて、車を走らせる、というのがそのしくみ。これができれば、燃焼生成物は水だけだから安心だというわけです。

銭勘定にとらわれねば、作れるはず。なんとか技術家さんにお願いして、水素エンジンが日の目をみることを、心から希望する次第です。

材料・エネルギー源は極めて豊富である上、有害産物はまったく生じないのですから。

みなさん、何卒よろしく。

（一九九三年一二月八日『米寿』のお祝いをしてもらった記念としてー小野喜三郎）

《印刷が遅れて、ごめんなさいー会長》

ある大学院生のひとりごと

〇〇〇郎

「あなたが住んでみたいと思う所はどこですか」という質問をすると、必ずと言っていいほど京都という都市が上位にあげられる。古都、観光地といった良いイメージが人々の間に広まっているためだろう。しかし、実際に住んでみるとどうか。夏は地獄の暑さに襲われ、冬は暖かいくせに雪が降るために道路はグチャグチャになりとても歩きづらい。外から眺めて思うことと、実際に内で体験することとはかなり違うものであることが多い。

大学というと立派な人物がウヨウヨいるような感じがする。余程のことがない限り悪いイメージはないだろう。私は二年前に金沢のある大学を卒業し、京都のある大学院に入学した。私の入った研究分科は教授一名と助手二名からなっている。入学当時何よりもびっくりしたのは、彼ら教官が実験をしていることであった。金沢のある大学に在籍当時には見られなかった光景であった。私のいた講座の教授は足音をさせずにうろついていただけだったし、助教授は昼頃やってきて夕方にはかえってしまうという、研究活動とは無縁の人々であった。教官とは研究をする人のことだったのか！

京都のある大学では十月になると四年生の卒業研究が始まる。今年は二人がやってきた。それぞれが助手のもとで指導を受けることになった。助手は四年生が実験操作になれるまでつきっきりで実験を行っていた。これも金沢のある大学ではみられなかったことである。私のいた講座には助手が存在していたが、教授と助教授にとって余りにも怖い人物であったため、《怖くなんかないっ！：Ｆ》　講座の運営には組み入れられていなかった。そのため、助手が学生の研究指導にあたることはなかった。ところが、学生を一手に引き受けていた助教授は何故か学生を指導しなかった（本人は指導しているつもりだったのかもしれないが）。教官とは学生の研究教育も行う人のことだったのか！

京都のある大学ーー面倒なので、仮に京大と呼ぶことにするーーに来てから気になることの一つに、学生の教授に対する言葉遣いがある。必要以上の敬語を使っているように思えてならない。媚びを売っているのか、それとも本当に尊敬の気持ちを表しているのか。《会長も京大時代、そんな言葉遣いしてたんですか？：６局長。先生がしてたなあ：会長》

金沢のある大学ーー以後金大と呼ぶーーではどうだったか。ある年のこと、某教授が定年退官し、その後任に六十歳の人物が就いた。当時の四年生であった早〇という学生は、じじいが辞めて新しく来たのがじじいだということから、「ネオじじい」という呼称を付けた。この呼び名はあっという間に定着した。もちろん、教授に対しては普通の丁寧な言葉を使ったが、本心と口から出る言葉は違うということである。《お前もそうか？：会長。当たり前やないですか：６局長。それなら、本心はおれを尊敬してるんやな：会長。・・・？：６局長》

では京大のエリート院生は何を考えているのか。普段の会話を聞いていると、彼らの頭

の中では階級分けが当然の如く行われているのがわかる。教授は助手よりも偉い。大学に残って研究者になる者は企業に就職する者よりも偉く、大学院をでた者は大学をでただけの者よりも偉い。事実、修士課程をでたら企業に就職するつもりだという学生を評して「そんなじゃあ大学院に来てもらっちゃ困る」と言い、海の動物が好きだから受験したいという学生には「その程度じゃあ修士までなんだろうな」と言う。さすがはエリート、自分も学生のくせに言うことが違う。《さすが京大の学生。すごいこと言うんですね：６局長。ぼくら学生の頃は、もっとすごいこと言うてたで。「先生。そんな実験しても、何にもわかりまへんで」とかね：会長》　私の実験にまでいちいち口出しするところなどは、全く教官気取りである。また、京都にきて二年が経つが、彼らが教授の研究教育方針を賞賛するのを聞いたことがない。どうやら教授個人に対する尊敬ではなく、人の上に立つ地位や身分、肩書きに対する尊敬の念が言葉に表れているらしい。

修士課程を終えることになった。課程を終了するには、研究内容を発表しなければならない。研究発表というとなぜか抵抗感があるが、今回は別だった。同じ講座で別分科の助教授は、私のいる分科の発表に対し何かとケチを付けるので、自分にはどんなことを言うのか以前から興味があったからだ。昨年のことである。この助教授はこちらの分科の院生の研究がたまたま取れた抗体で当初の目的と違う現象を扱ったことを指して、最初の興味と違うことをやることは無意味だと批評した。ところがこの助教授は数カ月前、たまたま取れた抗体を使った、当初の目的と異なる一連の研究で、彼の分科出身の人物に博士号を与えている。このような一貫した主張を持たない人物のもとにも十数名の学生が文句も言わず、今日も勉学に励んでいる。耐え難きを耐え忍び難きを忍んでいるのだろうか、それとも有名な研究室にいることで満足しきっているのだろうか。発表当日、何でも来いとばかりに挑んだが、こんな奴には何を言っても無駄だと思われたか、大したことは言われなかった。肩すかしをくった感じである。ここに書くネタがなくなってしまった。《ネズミ取りでも、出そうやなと思って用心してたら出んものな：会長》

その夜、分科での飲み会が終わってからのこと、教授と数人の学生とが、京大の女性は自分の意見を持っているとか何とかいう話しをしていた。私の頭にＦという人物が浮かんだので、《変なところで浮かべんといてよ：Ｆ》

京大をかじった人は何かと反発する傾向にあるみたいですね」

と口をはさんだ。教授はニコニコしながら「そうです、そうです」と言った。そこですかさず、「特に権力に対しては」と付け加えると、

「いや、権力じゃないですよ。習慣に対してです」

なるほど、と思った。京大をでた人々のほとんどは権力をふるう立場の者であって、権力に対抗する勢力ではない。彼らは企業のトップや大学教授や、独裁をふるう日本生物学会の会長だったりする。しかも習慣に反して助教授でありながら学生の研究指導をせず、編集作業ばかりやっている。《おい、お前、批判されてるぞ＝会長。どうしてですか？＝６局長。編集作業やってるのは君やないか＝会長。ぼく、そんなこと、やってませんよ＝６局長。そんなら、何やってるんや、君は＝会長。何やってるんでしょうねえ＝６局長》

東大をでた人々も同様に政治家、官僚、企業のトップや某大学某講座の二代目教授など権力をふるう立場に就く。違うのは習慣に従うことで、賄賂をもらったり贈ったり、一代目とそっくりの講座運営方針を取ったりしている。

感心している間に名前についての話題に移っていた。院生の一人が、昔のように成長と共に名前を変えて行けたらいいのにと言った。昔の名前での発言には責任を持たなくていいからだそうである。そこで、それでは余りにも無責任だ、考え方を変えたなら、あの時の自分は間違っていたということも同時に言わなければ説得力はない、と反論してみた。これを聞いた教授は、

「いや、名前を変えるというリスクを負うのだから、名前を変えたらそれまでの責任は無くなるでしょう」

という。同じ人物の主張なのに何で責任が無くなるんですか、と問うと、

「名前を変えるんだから責任はなくなりますよ。だって、名前を変えるんだから。そうでしょう」

酔っぱらっているのか、説明にならない説明が続いたので、そうですねと切り上げた。そしてまた、なるほどと思った。この東大出の教授によると、とにかく名称を変えてしまえばそれまでの責任は回避できるそうだ。ほとんどが東大出身者である官僚が国の戦争責任を認めようとしないのは、大日本帝国から日本国へと名前をかえたのだから、大日本帝国の名で行った戦争の責任は負わなくてよいという、エリート独特の考え方によるらしい。旧田中派が新生党と名前を変えれば金権体質のイメージが払拭できるし、野党から与党になれば社会党のように主張を変えても責任は問われないのだ。もっとも、考え方や物の見方などは自分でも気づかないうちに変わるものではある。《東大教授って、変なこと言うんですね＝６局長。変なことじゃないよ。名前を変えるというのは、それまでの「業績」も全部なくなるということで、また一から出直しになるんや＝会長。なるほど。じゃ、大学教官は５年毎に名前変えさせたらいいんですね。そしたらまた学生にもどって、卒業研究から始めて＝６局長》

他大学の院生となったが、金沢大学在籍当時一年上の学年に、Ｆという人物が絶賛した学生がいた。《ちょっと誉めたけど、絶賛なんかしてないわよ＝Ｆ。よかったな。Ｆさんに「絶賛」なんかされたら、一生ひどい目に合うところだったよ＝会長。それは、会長を見てたらよくわかります＝６局長》　彼は自分の興味を卒業研究のテーマにしようとしたために、いろいろな講座をたらい廻しにされた経験を持つ。その彼が研究のため二ヶ月ほど京大に来たことがあった。ある日、某大学で博士課程への進学を断られ、試験すら受けられなかった学生がいたことを彼に話すと、

「もう、他人のそんな話を聞いても何も感じなくなったなあ」

と言った。そこですかさず、

「それは馴染んだからですよ」

と言ってみた。彼は「違う！」と否定したが、後に続く言葉は出てこなかった。

他人に思われていることと、自分で考えることはかなり違うものである。他人を批判す

ることは易しいが、《他人を批判するのもそんなに易しくないよ。陰で悪口言ってるのなら易しいけど＝会長。そうですね。だから、会長批判は陰でやってます＝６局長》　自分を批判することはきわめて難しい。それも自分の利益がからんでくると、自己批判などできたものではない。《その不可能な「自己批判」を強要した２０年前の学生ども、「自己批判」せよ！＝生態学講座教授》　大学では自己評価調査書なるものを作製している。その様式は研究分科の論文を数年分羅列しただけのものから自己評価など何処へやら、これでは自画自賛／学生批判じゃないかというものまで様々である。《大学の研究は院生学生がやっているんだからこうなるのは当たり前だよ。学生がよく働いて業績が上がれば教官が「自画自賛」し、働かなければ「学生批判」になる。ところで、君の「分科」はどちらだね？＝会長》　これで大学改革を目論んでいるのかもしれないが、今のシステムにどっぷりつかっている者に動けと言って動くはずはない。政治家に政治改革をさせ、霞ヶ関の役人に行政改革をやらせるようなものである。本気で改革を目指す気があるなら、下からの声に素直に耳を傾けるか、誘惑に負けない第三機関に任せたほうがいいんじゃない？《下からの声って、院生や学生のことかね＝会長。そうですよ。だから会長はぼくの言うこと、聞かなくちゃいけないんですよ＝６局長。聞くから、何か言うてみ＝会長。・・・？：６局長》

　前にも書いたが、修士論文の発表というものを終えた。実験のデータを取っているときは自分でも今一つ心許なく思えたのだが、それを文章にしているときにやたらと格好つけた文章を書いていることに気がついた。読み返してみると、いかにもそれらしいことが書かれている。初めてこれを読む人は信じてしまうんじゃないだろうか。《人を信じさせるくらいもっともらしく書けるようになったら、大学教官の資格があるよ。やっぱり君は出世頭だね＝会長。じゃ、彼と出世競争しなくちゃ＝６局長。君はまだ大学教官にはなれんな＝会長。もっともらしく聞こえませんか＝６局長。》　数カ月前会長と会った時、「大学教官というのは大嘘つきのことをいうんやで」と言っていたのを思い出した。《そんなこと言うた覚えはないぞ＝会長。やっぱり大学教官って、「大嘘つき」なんですね＝６局長》　馴染んでいるのは、実は自分だったのかも。

村　の　風　景

渡　辺　　継

昨年末（1993･12）に米の自由化が決まった。最低輸入義務（ミニマムアクセス）だと言うかもしれないが、３～５％を４～８％と大きく譲歩させられ、しかもこの特例措置としてのミニマムアクセスを受け入れた時から７００％の関税を受け入れたものとみなし、毎年15％づつ関税が下がってゆき、期限後の７年目からはこの引き下げられた関税から始まることになる。特例措置を継続する場合にはさらに、ミニマムアクセスが引き上げられるだろう。これは事実上の自由化である。あれだけ自由化反対が叫ばれる一方で、自由化を進める人・必要だとする人がいる。自由化すればどのような影響があるのか、自由化によって農業はどのように変わってゆくのか。

価格の面から言えば確かに安くなるかもしれない。無節操な工業製品の輸出による円高の分を差し引いても、日本の米は多少高い。アメリカの農業は、広大で平坦な土地に日本の小さな村一つ分が一枚の田、と言う様な米作りで、これならば機械化により効率的にもできるだろう。だが、本来あまり稲作に向いているとは言えない土地であるので、井戸を掘って地下水を汲み上げ散水するなど、多少無理をして作っているために、地下水中の塩分が表面にたまり、あまり長く稲作を続けられないと言う。農業商社（アグリビジネス）など大資本は次々と場所を移って行けるが、それと価格競争をさせられる家族農家はそうは行かず、倒産を強いられる。また日本の様に遠い国に輸出するとなれば、輸送料やそのための燃料もかかるし、輸送中の虫や腐敗の被害を防ぐため、収穫後の農薬（ポストハーベスト）も大量に使うことになる。加えて、アメリカの米には補助金がつけられているという。現在の農業保護指数の取り方では現れてこないのだが、稲作農家の収入の九割近くが補助金であると言われているのだから、安いという価格の面からだけでは、一概に比較することはできない。

一方、アジアの米輸出国タイの米はどうであろうか。タイの米は、種類が違うので主食用としては使えないかもしれないが、味噌や醤油あるいは外食産業・冷凍食品用のピラフやドライカレーには使えるかもしれない。タイには、日本の様に農地や機械の高価さもなく、アメリカのような広大な土地もないが、稲作に適した自然条件と、そして何と言っても労働力の安さがある。しかし、その、人としての扱いを受けないような仕事をさせられている人々と、価格競争をするために、日本の農民にもそのような仕事をさせようと言うのだろうか。

それでも、輸出国はまだ良いのかもしれない。日本の米生産量は１０００万トンと言われているが、これに対し世界の市場に出回っている米の量は、約１３００万トン程度。この狭い市場に、金にものを言わせて日本が買いあされば、安い米を輸入している貧しい国はどうすれば良いのか。今回の不作による緊急輸入が決まったというだけで、米の世界市場での価格は上がっている。工業製品と異なり、天候に左右される農作物は、いつ不作に

よる品不足で価格が上がらないとも限らない。小麦などは生産地が散らばっているために、世界的な規模での不作でない限りそれほどでもないが、米は、アメリカを除けば、ほとんどアジアで作られ、そしてアジアで消費されるため、少しの不作でも大きな影響がある。金のある日本は良いが、金のない国はどうなるのか。かつて日本は大豆を輸入することになり、国内の大豆生産量が極端に減った。そこへ不作によって価格の高騰が起こり、大きな痛手を受けた。水田は、一度耕すのをやめると元に戻すまでに何年もかかり、足りないからすぐ作れとは行かない。ただでさえ農作物の自給率が低く、大半を輸入に頼っている日本が、安いからと言う理由だけで米も輸入に頼って良いのだろうか。

それ以外の問題もある。今世界では、砂漠化や都市化によって、多量の農地が減少しているといわれる。一方、人口は増加するばかりだ。このような中で、日本が安いと言う理由で農作物を買いあさり農業をやめて行けば、飢えに苦しむ人びとはますます増えてゆくだろう。工業を押し進めて行った結果地球の環境を悪くしてゆき、それが農地を減らすことになった。加えて農業をやめてゆけば、どうなるかは目に見えている。日本と言う小さな島の国も、世界に大きな影響を与えるということを考えなければならない。

日本は、工業製品の輸出によって外貨を獲得した。だから農業も、合理化して国際競争力をつけろと言われるが、全ての価値を経済原理を優先し、貨幣価値だけで計ろうとするのは間違いではないだろうか。アメリカの農民の数パーセントを占めるに過ぎない農業商社である穀物メジャーが、農業所得の半分近くを占めている。その穀物メジャーは、合理化の下に広大な土地をもっと大きくするために、地面を削り防風林を倒し地下水をくみ上げ多量の肥料・農薬を撒き、そして収量を上げる。しかし、このような無理な農業では長く続けることはできず、土地を何も育たない地力のない不毛の地にして去ってゆく。父から受け継ぎ子に伝えるために、地力を残すことを考えた家族農家はどうすることもできない

日本では、材木の足りないときに多くの森林を伐採し、その後に早く儲かるからと、まさに合理性の下にスギなどの針葉樹を植え、山は多様な雑木林から針葉樹だけの不自然な山に変わった。針葉樹は成長は早いが、ブナなどの広葉樹に比べ根を深く張らない。結果、雨水をためられず、雨量が多くなるとすぐ土砂崩れを起こしてしまう。昨年の九州の集中豪雨であれだけの被害が出たのも、このことが原因のひとつといわれている。

アジア・アフリカではどうだろうか。ここでは先進国のためにコーヒーやバナナなどを大量に作っており、国の為政者がそのためのプランテーションを整備する補助をしたり、企業が入っていったりする。補助を受け整備され安い労働力で作られた農作物は、当然安く売られ安く買われる。一方、自分たちの食べる分は作らせてもらえず、輸入に頼ることになる。機械を大規模に使って作られた主食用の小麦やとうもろこしは、安く輸入できるために、少ないながらも残っていた国内の生産者は意欲を失うことになる。植民地時代から続く経済構造ということもあるのかもしれないが、益々人々を貧しく、そして権力者・企業・商社の食い物にされながらも、先進国のそれらに頼ってでしか生きてゆけなくされてしまう。それでもなお、経済効率や経済合理主義を優先して考えてゆくのか。

日本の米作りも、合理化の努力をしていないわけではない。少しでも売れるようにと、うまいとされるコシヒカリやササニシキを作ったり、収量を上げたり、寒い土地にも作れるようと品種を改良したり、無理をしてでも機械を入れたり、と。しかし、その結果はどうだっただろうか。農薬漬けと言われるほど大量の農薬を使うことになったし、寒さに弱いササ・コシ一辺倒は、少しの寒さに収量が減り、単一品種の作付けであるが故に、少しの土地の違いや気象の変化についてゆけなかった。儲からない山間地の小さな田は、こうして荒れて行くことになった。

日本のように、山岳地帯で傾斜の多い土地では、むやみに田を大きくすることは困難だ。畔（あぜ）に区切られ水を張った田は、細やかな水管理が必要で、大きくするにはかなりの区画整理の費用と地理的条件がなければできないし、できたとしても効果は薄い。しかし、逆に畔を区切り水を張ることで、雨水をためるダムの役割を果たし、地下水を蓄え、表土の流出を防いでいる。しかも米は、毎年同じ場所で作っても、いや地（連作障害）を起こさず、他の、例えば小麦やとうもろこしやその他の穀類と比べ、同じ面積での収量は格段に多い。これからの世界的規模での食料不足にこれだけの利点がありながら、輸入に頼り農業をやめていって良いのだろうか。人間が生きる上に必要不可欠な食料を、安全に安定して得るためには、自給することが必要なのではないのだろうか。

高度成長期には農村から人手を狩り集め、米が豊作になると減反を強要しながらそれに見合うだけの補助も後ろ楯も無く、現在では米価を１５年前の水準に引き下げ、食べてゆけないからと兼業で働きに出れば「やる気が無い」と罵られる。今回の米不足に減反を緩和するかと思えば、すぐ輸入に走る。農家は輸入した残りしか減反緩和に回って来ないのではと不安で、今年の作付けの意欲も失ってしまう。今回ほどの冷夏は珍しいこととは言え、天候の不順による不作は今までも何度もあったのに、一度の不作で直に米不足になるのは、現場を知らず考え方が甘かったせいか仕組まれたものかはわからないが、いずれにしても人災だと言える。これらは全て農業の軽視であり、農民への差別ではないか。全ての価値をお金で考え、農業の持つ多面的な価値をまったく無視した、経済合理主義一辺倒の考え方の現れではないのか。経済合理主義の前では、農業のせいで失われた蛍も美しい田園の風景も、顧みられることは無い。売れるからといって無節操に輸出した工業製品による黒字のつけを農業に背負わせるのではなく、飢えで死んでゆく人々がいる現代に、大量の残飯がごみとして出される『飢餓の中の飽食』を反省すべきではないのか。マスコミや一部の企業に踊らされず、合理性だけを追求するのではなく、心の豊かさやもっと大切なものがあるように思える。

今の農業が良い方法だとは決して言えない。農協の言いなりで農薬を世界一使い、機械を使って余った時間を他の仕事に行く。一部の土地成金は、田植え日和に近くのゴルフ場に行く。問題は確かに多い。しかし多くの、まじめにやりながら苦しい農家が、なぜそうなってしまったのか・原因が何であるのか、考える必要がある。

これまで特に米のことを述べてきたのだが、米だけが素晴らしいと言っているわけではない。麦には麦の文化があり稗（ひえ）・粟（あわ）・きびなどの雑穀にも、雑穀の文化がある。長い歴史が繰り返され、必要が知恵を産み、そして積み重ねられる。先祖の汗と

努力がしみ込み、伝えられ、脈々と続けられた、それが畑であり山であり知恵である。そして、それが文化なのではないか。

赤とんぼがとび、蛍が舞う。家からは湯気が立ち昇り、笑い声が聞こえる。そんな村の風景がどうなるかは、我々次第だ。

【追記】

その後、本格的に米の輸入が始まり、各国から米が輸入されるようになった。日本の米が不作で、“しかも”在庫不足のため輸入させてもらっている米を、うまくないからと言って、国内産の米を買いあさり、それにつられた漠然とした不安感や、企業のもくろみで、米不足パニック（米騒動）のような状態に陥った。今の日本で、米がないからと言って食べるものがない訳ではない。パンもあればうどん・そば・ラーメンなど何でもある。

政府はこれに対し、減反を緩和するかと思えば、食料管理制度（食管制度）が古く時代後れであるから見直しすると、的はずれなことを言い始めた。責任を逃れようとし、関知しないことに決めたようだ。

食管制度については、いろいろと意見が分かれる。自由米（いわゆるヤミ米）を作る人々は、自由に作って売りたいが、食管制度が足かせになっている。しかし米価が安くおさえられているために、少しの自由米が高く売れる。一方、天候に左右される不安定な農作物を、安定した価格で買ってもらい、安心して作りたいと思う人々は、減反を強いられ、価格を低く押さえられている。そうした中で、一部の消費者の「農薬の心配のない、安全な米」・「おいしい米」を食べたいという声に、無農薬・低農薬の米を作る人々が現れ、これは特別栽培米として扱われている。

現在の食管制度に問題点や弊害・運用のまずさなど、いろいろあるにしても、農業は何らかの形で、国などの大きな単位で守らなければならないものだと思う。工業と違い、厳しい自由競争には合わないものだと思う。確かに、農業の技術は進み、大規模化・機械化によって合理化できている所もある。付加価値を付けた花や果物の栽培によって、経営上十分成り立つ分野もある。しかし、それでどうなるかと言えば、山間地の棚田などの弱い部分は切り捨てられてゆき、企業などの参入により、投機的に扱われ、食品の安全性など望むべくもない。農業は食べ物を作るためだけの物ではない。

海外からの輸入にしても、経済的な侵略になりかねないし、いくら安いにしても、輸送のためのエネルギーは浪費する。

現在、農民が保護によって甘やかされている、という批判も確かにあるだろうし、実際そうなのかもしれないが、それはそれでやり方を考えればいい。とにかく、生きる上で必要な食べ物、そのことに注意を払う必要がある。

日本の農業が、国内で終わる問題であるのなら、収量を上げるために安全性を無視したり、山間地を不動産屋に売ったりして、農家が儲けるのもいいし、安全性を求める運動があっても良い。しかし、これは国内では納まり切らない問題も含んでいる。世界の人口のほんの何割かの人間が、世界の食料の半分近くを食べている現代。我々の食べている牛や

豚、それに食べさせている穀物を、平等に分配すれば、世界の食料問題は解決するといわれている。全てどこかでつながっている。『飽食の中の貧困』　そのことをもう一度考えなければならない。

【参考文献】

井上ひさし『コメの話・どうしてもコメの話』（新潮文庫）
山下惣一　『今、米について』（講談社文庫）
祖田　修　『コメを考える』（岩波新書）
渡部忠世　『日本から水田が消える日』（岩波ブックレット）
坂本進一郎『農民よもっと怒りを』（御茶ノ水書房）
『週刊金曜日』（株式会社金曜日）

疑問・質問・反論などあれば、どうぞお寄せください。

北朝鮮とアメリカと、どちらが怖い？

奥野良之助

朝鮮半島で紛争が起こればどうするか。

今、日本の平和主義者に、難題がふりかかっている。

カンボジアやソマリアや旧ユーゴスラビアのような、はるかはなれた遠い国なら、平和主義者は「自衛隊の海外派遣絶対反対」と唱えておけば、それですむ。わが「金沢大学平和問題ネットワーク」も、ずいぶん唱えてきた。ところが、朝鮮半島は、「対岸」にはちがいないが、「対岸の火事」と澄ましているわけにはいかない。こういう場合は「一衣帯水」と言う。私のような年寄りは、すぐに40年前の朝鮮戦争を思い出す。あの時は、福岡の板付基地から爆弾を抱いた米軍の飛行機が飛び立ち、灯火管制まで行なわれた。九州大学の友達から生々しい話を聞いて、京都にいた学生の私も、けっこう緊張したものである。その朝鮮戦争の悪夢が再現しそうになると、「やっぱり自衛隊は要るのかなあ」と感じる平和主義者も出てくるかも知れない。

このような状況は、憲法を改正し、徴兵制を敷き、強大な軍隊を持って世界の政治・軍事大国になろうと考えている人にとって、絶好のチャンスである。表向き羽田内閣、裏向き小沢内閣は、ことさらに朝鮮半島の危機をあおりたてている。熊谷官房長官はテレビの番組で、朝鮮半島で軍事衝突が発生したときには、「合意さえあれば、一気に危機管理体制を作ることはできる」「事態の推移を見て、国民に訴えて、政治の側も対応し直すことは必要だ。そのための素材はきちっとできている」とはっきり宣言した（1994・5・2朝日）。

「危機管理体制」とは何ぞや。「戦時体制」のことである。軍隊の移動のために高速道路や鉄道を占拠したり、空襲に備えて灯火管制を敷いたり、テレビ・ラジオ・新聞の報道を規制したり、食料や物資を統制したり、要するに国民の権利をすべて奪い、義務の履行を強制する「体制」を作るということである。

もちろん、こんなことは憲法はじめ、あらゆる法律に違反する。そこで、憲法にさえ優越する臨時立法を立てる。これが「有事立法」といわれるもので、すべての法律の一時的効力停止を行なうのである。兵隊が足りなくなれば、「有事徴兵制度」を作ればいい。金沢大学だけで５、６０００人、一個旅団くらいの兵力が供給されよう。

つまり、熊谷官房長官は、そういう「有事立法」の準備はすべてできていますよ、合意さえあれば、すぐにもできますよ、と言っているのである。北朝鮮の核疑惑、ミサイルの完成は、この「合意」を日本国民に強制する、絶好の切り札として使われている。ゆめゆめ「合意」など与えないようにしよう。

一度有事立法を認めると、つぎは平時でも認めなければならなくなる。つまり憲法改正である。それは、戦後の日本支配層の悲願であった。

日本国憲法第９条を引用しておこう。

第９条（１）日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
（２）前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

素直な気持でこれを読めば、日本は軍備なるものを一切持たず、いかなる戦争にも手を出さないとしか、理解できないはずである。ところが、現在日本は、世界有数の実力を持つ自衛隊と称する「陸海空軍」を持っている。

その秘密は、９条第１項の「国際紛争を解決する手段としては」という挿入句にある。これを入れることによって、ここでいう「戦争」「武力行使」から、日本を守る自衛のためのものは除かれている、という解釈が出てくるのである。第２項でも、「前項の目的を達するため」がこれを受けて、自衛のための軍備、つまり自衛隊の存在は許されるという強引な解釈が出てくる余地が残されている。

平和憲法が施行された1947年には、すでにアメリカとソ連の間の東西冷戦は始まっていた。そして、わずか３年後の1950年に朝鮮戦争が起こり、マッカーサーの指令によってまず警察予備隊が作られ、保安隊を経て自衛隊となる。この時ももちろん、これは憲法違反だという論議が激しく戦わされた。私が高校生から大学生にかけての頃である。芦田均という政治家がいて、この二つの挿入句はこのことあるを予期して、私が入れておいたのだ、などと言ったことも覚えている。

たしかに、この二つの挿入句を除くと、憲法９条の条文の意味は極めて明白となる。たとえ自衛のためであろうとも、戦争という武力の行使はしないし、軍備は持てないことになる。

もっとも、この条文でも、自衛権そのものを否定しているという意見は、憲法学者の８０％くらいを占めている、と、わが日本生物学会の会員で、金沢大学平和問題ネットワークの象徴でもある憲法学者から聞いた。それは、「正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求」することと、憲法前文の解釈からそうなるというのである。

しかしながら、憲法学者多数の意見は踏みにじられ、歴代自民党政府は、自衛のための戦争、自衛のための軍備を合憲として、憲法解釈の拡大をつづけてきた。いまでは国民の多くも、それを認めているようである。私は死んでも認めない。死んでしまってからでは言えないから、今のうちに言っておく。

ところが、日本政府は1951年、アメリカと講和条約を結んだ。その時、日米安全保障条約、いわゆる日米安保も同時に締結した。これは一種の同盟条約であって、日本がどこかに攻められたらアメリカが助け、アメリカが攻められたら日本が助けるというものである。ところが、アメリカが助けに来るのはいいが、日本が直接攻撃されていないのにアメリカを助けに行って戦争するのは、憲法に違反する。それは、どこかの国とアメリカとの間の「国際紛争」であって、「国際紛争を解決する手段としては」戦争してはならない、軍備を持ってはならない、と、明確に書いてあるからである。

そこで日米安全保障条約ではその点をあいまいにして、日本の施政権の及ぶ範囲内での侵略に、共同で対処するということになっている。簡単に言えば、アメリカ本国がどこかの国に攻撃されても、日本が太平洋を越えてアメリカを助けに行かなくてもいいが、日本国内にあるアメリカ軍基地が攻撃を受けた場合には助けるということである。

当時の日本は敗戦の痛手からまだ回復しておらず、アメリカは世界でずば抜けた軍事力を持った国であった。アメリカが日本を助けることはありえても、日本がアメリカを助けるなど、笑い話にしかならない状況だった。だから多くの日本人はこの条約を、アメリカが一方的に日本を助けてくれるものだと受け取っていたようである。

そういうと、日本が一方的に得をして、アメリカは丸損のように思われる。片務条約だから双務条約に変えようという意見はアメリカにもあるらしい。だが、あのアメリカが、自分に得にならない条約を結ぶはずはない。

当時アメリカは、共産主義ソ連と対決していた。ソ連の西側には、ドイツ、フランス、イギリスなど、 西ヨーロッパの諸国がある。ソ連はまず西欧諸国を攻撃せざるを得ない。そこでアメリカは、西欧諸国と一緒に、北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）を作って西側の防衛線とした。ソ連の東側には、日本列島が長く延びている。ここでソ連軍を食い止めるとアメリカ本土は安泰である。つまり日本は、アメリカ防衛の最前線として考えられていたのである。そしてそのためにアメリカは、沖縄をはじめ日本の中に多くの強大な軍事基地を持つ権利を認められている。日米安全保障条約は、だから、日本のなかにあるアメリカ軍の基地を日本が守るということになる。朝鮮戦争の時はもちろん、ベトナム戦争の時も、日本の中のアメリカ軍事基地から攻撃機が飛び立っていたのである。

いくつかの国が一緒になって共同防衛をする。これが「集団的自衛」というものである。国連もまた、集団的自衛の一種となる。国連安全保障理事会が決議すると、自分の国が攻められたわけでもないのに、アメリカやイギリスやフランスは、多国籍軍なるものを作って、イラクに攻め込んでいく。

ところが、これこそ明確に、日本国憲法が禁じていることである。歴代自民党政権は、だから、「集団的自衛権」は日本にはない、と言い続けてきた。そのかわり、純粋に自衛的な組織としての自衛隊を容認し、発展させてきたのである。

その集団的自衛権を認めようとする動きがある。憲法を拡大解釈し、あるいは、憲法の改正までもくろんでいるらしい。その錦の御旗は国連中心主義であり、イラクのような「無法国家」の存在である。

湾岸戦争のとき、多国籍軍に自衛隊を参加させようという動きはあったが、前の戦争ですっかり「気概」を失い、目先の利益を追う国民になってしまった日本人は、踊らなかった。戦後の機雷処理に、なんとか海上自衛隊の掃海艇を送ることができたにとどまる。おかげで１３０億ドル（１兆３０００億円）という巨額の金をふんだくられたのに、だれも感謝してくれなかった。

そこで、国連の指揮下に入れば、国連軍なのだから日本の憲法に違反しないといった暴論が出てくる。何が何でも、自衛隊を海外に派遣し、国際的に軍隊として認知してほしいという強烈な意向が、その後、カンボジア・モザンビーク・ルアンダ（ザイール）と続い

ている。

イラクは遠い国だった。日本の死活をにぎる石油の産地であっても、おおかたの日本人はあまり関心はない。ところが、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）は、おとなりの国である。ここで何かが起これば、のんきな日本人も関心を持たざるを得ないだろう。そしてこの国は、イラクとならぶ「無法国家」である。

ことの起こりは、北朝鮮が核爆弾を作っているらしいということである。「核不拡散条約」なるものがあって、これは、すでに核兵器を持っている大国、具体的には国連安保理常任理事国であるアメリカ・イギリス・フランス・ロシア・中国はそのまま持ち続けてもいいが、そのほかの国は持ってはいけないという国際条約である。そして、国際原子力機関（ＩＡＥＡ）なる組織が作られ、この条約に加盟した国に入って、ほんとうに原爆を作っていないかどうか、査察する権限が与えられている。ただし、核保有国である先の５カ国は、査察を受けなくてもいい。これほど露骨な差別的条約も珍しい。

この条約に、北朝鮮も加盟している。だが、ＩＡＥＡの査察を軍事機密を理由に拒否した。それは、５大国がやっていることである。だが、ＩＡＥＡおよび５大国は、北朝鮮が核爆弾を作っている、と騒ぎ始めた。そして日本の政府も尻馬に乗った。

北朝鮮が核兵器を持つとどうなるか。“あんな国”だから、いざとなれば使うに違いない。夢よもう一度と、韓国に攻め込んでくるかも知れない。第２次朝鮮戦争である。北朝鮮は日本を射程におさめるミサイルも持っている。日本だってふたたび核の洗礼を受ける可能性がある。平和憲法がどうのこうの、と言っている場合ではない。

「北朝鮮の問題は、大変な問題が極めて現実性を帯びて起こっているとの認識を持っている」「様々なシナリオに関して、備えをしておくことは当然で、検討していることは事実だ」「合意さえあれば、一気に危機管理体制を作ることはできる」「事態の推移を見て、国民に訴えて、政治の側も対応し直すことは必要だ。そのための素材はきちんとできている」

これは、現羽田内閣の官房長官熊谷弘氏のテレビでの発言（５月１日）である。具体的に言えば、もし朝鮮半島でことが起こった場合、日本はアメリカ・韓国とともに、対北朝鮮の戦争に参加するという意思表示である。航空自衛隊が北朝鮮を爆撃しに行くことはないと思うが、アメリカの艦船や攻撃機に基地を提供し、給油その他の支援をやり、敵前上陸の際には機雷の掃海くらいはさせられるかも知れない。韓国も、極東アメリカ軍も、掃海能力にとぼしく、日本が協力させられる可能性は高いという。敵前上陸前の掃海作業は当然、「敵前」で行われる。敵だっておとなしくはない。当然撃ってくるだろう。木造で武装の貧弱な掃海艇はひとたまりもない。そこで、自衛艦が護衛にあたる。かくして海上自衛隊は実際の戦闘に巻き込まれていく。

羽田内閣はそこまで覚悟している。でないと、「国連安保理の制裁決議が出れば協力する」とか、「制裁決議が出なくても、韓国・アメリカ軍に後方支援する」とか言えないはずである。

なぜそこまで覚悟しているのか。それは、そういう実績を積んで、日本の自衛隊を「国際紛争解決」のための軍隊に格上げしようと目論んでいるからである。小沢一郎氏のいう

「普通の国」になるためには、どうしてもそうしなければならぬ。「普通の国」とは、アメリカ・イギリスなど、先進大国を指す。日本は経済大国にはなった。しかし、政治大国・軍事大国とはいえない。そのためには世界の紛争に軍事的な「貢献」をしなければならぬ。そして、安保理常任理事国入りのおすみつきをもらおうというわけである。北朝鮮の核疑惑問題は、そのために利用されている可能性が高い。

とはいえ、私たちとしても、北朝鮮が核を持たないほうがいいし、日本に核弾頭付でなくても、ミサイルが飛んでこないほうがいい。そのための方策を考えなければならない。

だが、その答は実は簡単明瞭なのである。北朝鮮の身になって考えてみればいい。

日本の選択肢は二つある。一つは、韓国・アメリカと一緒になって北朝鮮と対決することである。もう一つは、平和憲法を盾に、中立を守ることである。アメリカ軍に基地を提供せず、後方支援もしない。北朝鮮はどちらの日本を望むだろうか。

北朝鮮にとって、中立を守っている日本を攻撃することは正に愚の骨頂である。中立日本を攻撃して敵方に回すことなど考えられない。日本は中立を守ることによって、あるかも知れない北朝鮮の核攻撃から免れるのである。

それがなぜできないのか。それは、アメリカとの「友好」関係による。アメリカ人は、武力で日本を守ってやっているんだと思い込んでいる。そのアメリカの若者が朝鮮で命を失うようなことになったとき、日本がのほほんと、中立でございと知らん顔をしていたら、アメリカの世論は沸き立つだろう。国交断絶まで行くかも知れない。そこまで行かなくても、日本の自動車の不買同盟くらいはできるに違いない。日米経済関係の断絶である。アメリカへ集中豪雨的な輸出をやって経済大国にのしあがった日本経済は、崩壊までいかなくても、重大な打撃を受けるに違いない。

日本の支配層は、北朝鮮の核兵器など怖がっていないのである。怖いのはアメリカである。事実、北朝鮮の核爆弾と比較にならないくらい優秀な性能の核兵器を積み込んだアメリカの航空母艦が、日本近海をうろついているではないか。その１隻は横須賀を母港にさえしている。このほうがよっぽど怖い。

先進大国は理性があるから、核兵器を持っていても使わない、という神話がある。これは、「核不拡散条約」の根本理念でもある。後進小国は時に理性を失い、何をやらかすかわからない。だから、核を持たせてはいけない、というわけである。

だが、こと核に関する限り、それを実際に使ったのは、世界に１８０もの国があるが、アメリカただ一国だけなのである。しかも、日本の戦争継続能力がほとんどなくなった頃に、無理を承知で使った。本土決戦で失われるアメリカ青年の命を救うためだ、という公式理由があるが、満州（中国東北部）に攻め込みそうなソ連軍をにらんでの投下であることは明白だろう。広島が８月６日、長崎が８月９日、そして、ソ連軍の満州侵攻が同じ８月９日である。

相手が日本ではなくドイツだったら、同じような状況になってもアメリカは原爆を落とさなかっただろうという説がある。白人種の有色人種への差別感は抜きがたい。それは、アメリカ軍がソマリアで行なった、西部劇さながらの行為でもわかる。

核兵器使用の実績を持ち、有色人種への差別感を持ったアメリカの航空母艦が、日本近

海をうろうろしている。たしかにこのほうが、北朝鮮の、あるのかないのか定かにはわからぬ核兵器より怖いことはたしかである。

600万人の命を失い、2000万人の命を奪った戦争を深く反省して、私たちは平和憲法をつくった。今の幻のような経済繁栄にしがみつきたいだけでアメリカに与し、また戦争への道をたどることは、愚の極みである。武器を片手に世界を脅し、経済を繁栄させるやり方は、すでに破産している。ほとんど無法と言っていいほどの殺人事件が横行しているアメリカ社会がいい例ではないか。日本もこのまま行けば、いずれそんな社会になることは目に見えている。

もっとも、だから北朝鮮の社会がいいと言っているのではない。戦前戦中の全体主義社会を経験している私は、洩れ聞く北朝鮮の社会に、反吐が出そうなほど嫌悪感を感じている。しかし、それは北朝鮮の人たちが選んでいる社会である。文句をつけるつもりはない。アメリカもまた、アメリカ人が選んでつくった社会である。だから、それはそれでいい。ただし、高性能の核兵器を積んで日本近海をうろうろし、脅迫するのだけはやめてほしい。

私たちがおおっぴらに主張できるのは、日本社会をどうするかということである。日本の行き方は日本人が決めればいい。アメリカ一辺倒の小沢一郎氏に決めてもらう必要などない。

アメリカの後ろについて北朝鮮と一戦やるのか、それとも絶対中立を守るのか。

それは今後の日本の進路を決める決定的は選択になるに違いない。

「銃は禁止されてもナイフがあるよ」
――「銃の規制」でアメリカから殺人事件はなくなるか――

奥野良之助

昨年日本で、銃によって殺された人は44人だそうである。けっこういるね。

一方アメリカでは、一昨年の資料だが、15377人が銃で殺されている。桁違いと言いたいところだが、桁が三つも違っている。一日に直すと約42人。日本の１年分を１日で殺してしまうわけである。（以上、『ＡＥＲＡ』誌1994・4・11号 『交通事故並みに射殺事件の起きる国』による）

一昨年の服部剛丈君の射殺につづいて、今度また二人の留学生が銃で撃たれて殺された。アメリカ人の反応はすばやく、国務長官自らが哀悼の意を表したという。お得意先の日本人だからそうしたので、銃で殺されたアメリカ人すべてにやろうと思ったら、国務長官は一日に42回、哀悼の意を表さなければならない。

いずれにせよ、大変な社会であることは間違いない。そこで、さすがのアメリカでも、銃を規制しようという運動が始まった。日本のマスコミも大々的に取り上げている。銃さえなくなったら、アメリカ社会は平和になるとでもいうように。

銃をなくせば、「銃による殺人」はなくなる。これほど明白でたしかなことはない。だが、アメリカから「殺人」がなくなるかというと、残念ながらそうは言えない。人を殺すのは別に銃でなくても、いろいろな方法がある。「大工　殺すに　刃物は　いらぬ、雨の十日も　降れば良い」というどどいつもある。いくらアメリカ民主主義ががんばっても、アメリカから雨をなくすことはできないだろう。

アメリカで殺人が多発するのは、そこに「銃があるから」ではない。何か原因があって、人を殺したいと思う人がいる。そこにたまたま銃が転がっているから、銃による殺人が多発することになるだけである。銃を規制してなくせば、ナイフ殺人が増えるだろう。ナイフを規制してなくすわけにはいくまい。銃はなくても日常生活に支障はないが、包丁がなくなったら西瓜にまるごと、かぶりつかねばならぬ。

では、なぜアメリカ人は、人を殺したいと思うのか。金のある人とない人の差が大きくなりすぎて、欲求不満がたまっているからだろう。その貧富の差は、政府の政策によってつくられる。

たとえば10年ほど前、レーガン政権は「小さな政府」を唱えた。資本主義は自由競争をもって原則とする。政府権力があれこれ規制せず、市場を自由放任しておくと、企業家は知恵をしぼって競争し、経済が発展する。油断したりのんびりしてたらたちまち破産するのだから、競争下にあるかぎり、人は油断なくあくせく働く。これこそが、経済を活性化し、生活水準を高める唯一つの道なのだ、とレーガンは言う。

レーガンは、例えば所得税の税率を30％と20％の二段階にした。何億ドル稼いでも30％取られるだけだし、年収１万ドルでも20％取られる。企業の活動に関しては、各種の規制

をなくして自由に商売できるようにする。少々、いや相当悪どいことをやっても罰せられることはない。企業活動こそが正義なのであり、人を出し抜いて金を儲けることこそ、「アメリカン・ドリーム」なのである。

もっとも、これはレーガンの発明ではない。アメリカは、インディアンを撲滅して建国して以来、ずっとそれでやってきた。1929年のウォール街の株大暴落に始まる大不況の時に、ローズベルト大統領が政府支出を大幅に増やして景気を回復しようと、ニューディール政策を取ったのが、むしろ例外である。

この結果、うまく成功すれば大儲けするが、失敗するとホームレスになるという社会ができあがった。1993年、ウォルト・ディズニー会長マイケル・アイスナー氏は、なんと年報酬2億ドルを得たという（1994・5・10付朝日新聞）。およそ200億円である。同じ「会長」でも、なぜこう違うのかね。

アフリカの難民が飢えている写真を見ても、「ああ、可哀そうに」と思うだけですむ。中には心を痛めすぎて、ハンカチを売り歩き、資金を溜め、アフリカまで難民を救いに出かける気高い人もいる。私が今使っているハンカチの幾枚かは、その気高い人たちに買わされたものである。でも、こんな人たちはごく小数で、多くはそれほど気高くはなく、次の日にはその写真を忘れることになっている。

しかし、同じ社会の中に、1年に200億円、1日5000万円もうける人と、明日食う金のない人とが共存していたら、つまり、ロールスロイスのリムジンに乗って豪華なパーティに出かける人と、それを路上で見送るホームレスの両方を見ることになると、次の日に忘れるわけにはいかなくなる。次の日にもまた見ることになるからである。

敗戦後の日本に、シャウプ博士なる経済学者がやってきた。そして、低所得者からは税金を取らず、高所得者からは実に最高75％の税金を取るとか、2、3回相続したら、相当な金持でも財産がなくなる相続税とか、きわめて金持にきびしい税制を決めた。もちろん、そこは抜目のない商売人のことだから、私の親父を含めて、いろいろの抜け道を早速開発してはいたが、それでも、このシャウプ税制は、日本における貧富の差の拡大を防いできたのである。

このシャウプ税制は、平和憲法と並ぶ戦後日本が世界に誇るべき制度だと、私は思っている。日本が今や、アメリカを追い越す金持国になったにもかかわらず、ときたまバラバラ事件が起こる程度で、平穏な社会を保っている一番の原因はここにある。大学の私の部屋はこの20年間鍵をかけていないのだが、なくなったものは一つもない。より正確に言うと、何かがなくなって困ったことは一度もない。なくなっても困らないものは、もともと要らないものである。もともと要らないものはなくなったほうが邪魔にならなくていい。それよりも困るのは、要らないものが持ち込まれてくることである。いつの間にか、枕と蒲団が持ち込まれ、時々その枕と蒲団に生身の人間がついていたこともある。簡単にいうと、学生が寝ていただけの話だが。一度、「一時停止」という大きな交通標識を持ち込んだものがいた。路上で見ると小さいが、部屋に持ち込むと、大きいものだね。私の部屋は「大学にあってはならない部屋」だそうで、出入りする学生は監視され、要注意学生になる。だから、部屋から出るとき、「一時停止」して「左右確認」せよという、持ち込んだ

学生の親心らしいが、何分大き過ぎて邪魔になって困った。しばらくしてまた持ち出されてしまったが、これはもともと私の所有物ではないから、盗まれたことにはならぬ。日本はかくのごとく、たいへん住みやすい国なのである。

その日本でも、「普通の国」になろうという運動が起こり、そろそろ怪しげになりつつある。「普通の国」とはアメリカのことであり、経済大国に並んで、政治・軍事大国になろうというわけである。すでに所得税最高税率は65%に引き下げられ、そのうち50%になる予定だという。相続税の軽減も日程に上がっている。一方で、大衆課税の消費税の大幅アップも間近い。年金制度や医療保険も後退し、弱者に対するしわよせは急激におしよせてくるはずである。

私は、税金を取るなと言っているのではない。北欧3国、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーは、世界一税金の高い国である。ただし、その税金は、世界一完備した社会保障に回される。それによって、障害者、年寄り、社会的弱者も一応の生活が保障される。だが、日本が目指すアメリカ型資本主義はそうではない。強者に甘く弱者に厳しい税制を敷き、競争によって経済発展と社会活力を引き出そうとする道である。この道は必然的に、小数の馬鹿げた金持と、多数の貧乏人を生み出す。

したがって、日本がアメリカ並みの「普通の国」になるというのは、今のアメリカにおける社会不安も同時に引き受けるということである。日本にはたしかに、アメリカほどの銃はない。だが、ナイフはたくさんある。日本人は昔から、銃はほとんど使わなかったが、刀による殺人には伝統がある。テレビでは毎日毎夜、「正義の味方」が日本刀をふるって、数十人の「悪人」どもを切り殺しているではないか。まあ、私もけっこうよろこんで見ているのだが。銃などなくても、人を殺すのに不自由はしない。

貧富の差が大きく、貧しい人の欲求不満が蓄積することによって、殺人は多発する。この、貧しい人の欲求不満を解消するいちばんてっとり早い道は、国威の発揚である。アメリカ軍がイラクを攻め、完勝した。とたんにブッシュ大統領の支持率は何と80%に達したではないか。

戦争によって最も被害をこおむる社会的弱者が、国威を発揚することにその欲求不満を解消するのである。日本でも、日清、日露、そしてアジア・太平洋戦争において、世論は戦争に圧倒的支持を与えてきた。この傾向は、貧富の差が大きい社会ほど激しい傾向がある。

日本が戦後、なんとか平和主義を通してきたのは、経済発展しながらそれほど貧富の差を大きくしてこなかったことが、最大の原因ではないかと、私は思っている。だからこそ、今、貧富の差を大きくするべく政策が転換されてきているのである。

今の「革新」とは、日本経済の能率化、規制の緩和、自由競争の激化である。それによって被害を受ける人まで、同調してはやしたてている。

規制を緩和し、自由競争を激しくし、能率化をすればどうなるか。企業も人も、コストを下げるために、骨身をけずることになる。それに耐えられぬ人は脱落してホームレスになり、何とか耐えてがんばっても過労死することになる。成功して年収2億ドルを手に入れる人は、ほんのわずかに過ぎない。

そこまでやって何が得られるのか。いろんなものが少し安く手に入るというだけのことである。私だっていま、ズボンを10着くらい持っている。生地が丈夫になったのか、私の動きが弱くなったのか、いつまでたっても穴が開かない。穴が開かないから捨てられない。仕方なくもう10年以上もはき続けているズボンもあるのだが。そんなズボンがちょっと安くなったって、ありがたいとも何とも思わない。ああ、この間、9割引1800円のブレザーコートを買った。あれは安かった。中国製の880円のジャンパーも安かった。これは、ちょっと寒くなったときのバイク用に愛用している。

そんなことして、何になる。建設業界の「談合」が、諸悪の根源みたいに言われているが、中小の建設業者が適当に仕事を分けて共存共栄しているだけではないか。その結果、建設費が少々高くなっても、世界に誇る日本の経済が耐えられぬはずはない。

官僚による規制もまた、諸悪の根源とされている。規制緩和は今や「天の声」である。でも、ちょっと待ってほしい。大型小売店の規制を緩めた結果、街の商店は次々とつぶれていくではないか。スーパーは人を疎外する。そして、強盗に狙われる。街のぬくもりを残すために、少し高い買い物をするくらい、いいではないか。もっとも、私自身は、村落共同体的ぬくもりは、あまり好きではなく、買物はもっぱらスーパーですませている。でも、この際、個人の好みは問題にしないでおこう。

日本は、おとなしく、平和に生きるべきである。社会に少々不合理なことが残っても、競争の結果世界へ武力進出するより、はるかにいい。政治・軍事大国にならなかったら、経済大国も崩壊するぞ、という脅しに屈してはならない。物質的な高水準の生活などに固執することはない。人間、食べて、着て、住むところと仕事があれば、それで充分なのである。

と、戦後のどん底から世界一の金持まで経験した年寄りは言う。

若い方は、どう言うかね。

《先の短い年寄りにだまされたらいかんよ。なにせ年寄りは、遊び方を知らないんだから＝3局長》《お前だって30年ほどしたら、年寄りになるんやぞ＝会長》《3局長って、誰ですか＝7局長》《君の先輩でなあ。どうしようもない遊び人や。そのくせ、こんなところへ時々出てきよるんや＝会長》《会長が勝手に出すのじゃないですか。ぼくはおとなしく遊んでるだけなのに＝3局長》

意志と能力
――二つそろえば「核武装」――

奥野良之助

私の部屋へ来ていた４年生が突然、

「ぼくは大学院へ行きたい」

と宣言した。

私は仰天した。

「君、『敵を知り、己を知らば、百戦危うからず』という言葉、知ってるか」

「なんですか？　それ」

「古代中国の戦争の名人、孫子の『兵法』のなかに出てくる言葉や」

「それがどうかしたんですか」

「戦争するとき、敵の力を知って、自分の力と比べてみて、敵が弱かったら攻める、敵が強かったら逃げる、百回戦争しても負けることはない、ということや」

「そんなん、当たり前やないですか」

私はぐっとつまった。たしかに「当たり前」である。でも、ここでひるんでは「教育」にならない。

「敵の力を知るのと、自分の力を知るのと、どっちが難しいと思う？」

「そりゃ、敵の力を知るのが難しいでしょう」

「と思うやろ。ところがそうやないんや。自分の力を知るほうがずっと難しいのや」

「そんなことないですよ。自分のことは自分が一番良く知ってますよ。だって、自分のことじゃないですか。敵のことは分かりませんけど」

私は教育をあきらめた。そして、つぶやいた。

「『敵を知らず、己を知らず、百戦危うし』か」

「何ですか？」

「いや、何でもない。こっちのことや」

彼は大学院へ行くという「意志」を持った。しかし、現状ではどう見ても、それだけの「能力」がない。大学院入試まであと２カ月。その期間ではとても「能力」はつきそうにない。結果は絶望的だろう。もっとも、彼のいうように、「自分のことは自分が一番良く知っている」とすれば、私の見方が間違っていて、案外通るかも知れない。結果は今秋、９月に出る。

人間何事かなすためには、「意志」と「能力」の二つが必要である。あふれるばかりの能力を持ちながら、田舎の水族館で毎日魚に餌をやりイルカにからかわれながら、ご機嫌な卒業生がいる。彼にはＤＮＡの段階で「意志」、つまり出世意欲に欠けているからである。《それ、昔の会長のことでしょう＝その卒業生。おれには向上心のＤＮＡはあるんやぞ。意志の力でおさえてるんや＝会長。ああ、そっちのほうへ、意志、使ってしまったん

ですね＝その卒業生。・・・？＝会長》　逆に、「意志」だけは人一倍持っているが「能力」がともなわず、結果として出世できない人はたくさんいる。どちらかというと、人生としてはこのほうが楽しくない。

ところで、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の金日成主席は、この間突然亡くなってしまったが、「わが国は、核兵器を作る能力も意志もない」と述べた。わが羽田首相は、この方も突然前首相になってしまったが、「わが国は、核兵器を作る能力はあるが意志はない」と言った。額面通り受け取れば、北朝鮮も日本も、核武装しないことになる。ただし、能力は一朝一夕にできないが、意志は一夜にして持つことができるから、日本のほうが核武装への道は近い。日本の支配層には、水族館の卒業生と違って、大国に出世したいという意志のＤＮＡが組み込まれていることは、間違いのない事実だから。

そこで、この両国前首脳の発言を、少し検討してみることにしよう。

ひと口に核兵器とか核武装とかいっても、いろいろな段階がある。

第２次世界大戦のさなか、まずドイツが、次いでアメリカが、原子爆弾を作ろうとした。先に作ったほうが勝つのだから、両者とも必死だった。実はわが日本も作ろうとしていたのである。日本の敗色が濃厚になってきた戦争末期、私はこんなうわさを聞かされた。

「あのな、秘密やけどな。マッチ箱くらいの大きさで、ニューヨークを全部つぶせるの爆弾があるんやでえ。それがもうすぐできる、いうこっちゃ。それさえできたら、アメリカなんか一発や」

たまたま私は大阪にいたから、大阪弁でうわさを聞いたのだが、別に全国に大阪弁のうわさが流れていたわけではない。なにしろ、アメリカの艦隊が日本へ近づいたら、「神風」が吹いて全滅するということさえ信じられていた時代である。それより少しは「科学的」なこのうわさは、相当広く行き渡っていたようだった。《そんなこと、ほんとに信じてたんですか＝７局長。信じてたで＝会長。信じられへんな、そんなこと＝７局長。おれには、教授が偉いと信じてる学生のほうが、信じられへんよ＝会長》　うわさだけでなく、実際にも研究は行なわれていた。日本でも原理は分かっていたのである。

ウランという放射性物質がある。天然のウランは、核分裂しないウラン２３８が大部分で、核分裂するウラン２３５はごくわずかしか含まれていない。そこで、このウラン２３５を濃縮し、分離しなければならない。実はこれに大変な手間暇と費用がかかる。ドイツと日本にはそれだけの金がなかった。20億ドルという、当時としては破格の金を使ってウランの濃縮に成功したのはアメリカだけだった。

ウラン２３５を分離すれば、原爆そのものをこしらえるのは簡単である。ウラン２３５は中性子を放出しながら核分裂を起こす。だが、ある量以下なら、放出した中性子がほかのウラン原子に当たらずに抜けていってしまう。《どの位の量ですか＝７局長。おれに数字は聞くなと、いつも言うてるやろ＝会長》《見つけたぞ＝会長。何をですか＝７局長。ウラン爆弾の臨界量や。12キロから15キロくらいらしいな＝会長。どこで見つけたんですか＝７局長。この本や＝会長（会長が見せてくれたのは、江畑謙介『兵器と戦略』朝日選書505 という本でした。戦時中の軍国少年にはかないませんね。こんな本まで読んでるんだから）》

ところが、ある量以上にまとめると、この中性子が外へ飛び出す前に他のウラン原子に当たるのである。するとそのウラン原子がまた分裂して中性子を出し、別の原子を分裂させる。いわゆる連鎖反応でウランは急激な核分裂を起こす。これが原爆の爆発である。その連鎖反応を抑えてゆっくり核分裂を起こさせているのが原子力発電所である。要するに早いか遅いかの違いで、原爆と原発の原理は同じことである。

このウラン爆弾は、ウランの濃縮という、原理は簡単だが金のかかる工程があるので、そう簡単にはできるものではない。北朝鮮でも金さえかければできるけれども、金がないから無理だろう。世界の成金国家日本なら、できないことはない。だが、今時そんな不経済なことをやるはずはない。

原爆でも原発でも、ウランを核分裂させると、またいろいろな核分裂を起こす物質ができてくる。そのうちの一つが悪名高いプルトニウムである。プルトニウムは自然には存在しない人工元素であって、これを8キログラムほどまとめると、やはり連鎖反応が起こって爆発する。《あれっ、数字が出ましたね＝7局長。この間、たまたま新聞で見たんや＝会長》　広島に投下されたのはウラン爆弾、長崎のはプルトニウム爆弾である。原子炉さえ動かせば、プルトニウムは大した金をかけずとも手に入れることができる。北朝鮮の原爆疑惑も、このプルトニウム爆弾のほうである。

自分でもよくわかっていない話をすると、話が晦渋になる。このあたりで、物理学者は止めよう。

さて、このプルトニウムがある量あれば、原子爆弾そのものを作るのは比較的簡単らしい。羽田前首相は「東大生にだってつくれる」と言った。その話がこの間、「金沢大学平和問題ネットワーク」の会合で出て、「金大生には無理らしいな」ということになった。その席には「金大生」もいく人かいたのだが、笑っていて怒らなかったから自覚しているのだろう。

ただし、爆弾だけ作っても、それを敵のほうまで運べなかったら役に立たない。1945年、アメリカが始めて作った原爆は重さ2トンもある大きなもので、B29という、当時一番大きな戦略爆撃機に積んで、広島に落とした。普通に落とすと、爆発したときB29そのものも巻き添えを食うから、パラシュートをつけてふわふわ落とした。

運ぶ手段がなくて、自分の国でしか爆発させることのできない爆弾など、ないほうがよかろう。ネットワークの会合では、軽トラックで運べるだろうか、とか、3人でかつげるだろうか、とか、不謹慎な話が出た。3人でかつぐというのは、日中戦争の爆弾三勇士のことである。敵のトーチカだったか鉄条網だったか忘れたが、三人の工兵が大きな爆弾を抱えて突撃し、自らを犠牲にして突破口を開いた。特攻隊のはしりのようなものだが、戦意高揚のために大いに宣伝された。私も、長い長い爆弾を抱えた「三勇士」の雄姿を、講談社の絵本で見た覚えがある。もっとも、こういう話題が出るのは、わがネットワークがいかに高齢化しているかを示す証拠でもある。《ぼくらはそんな年寄りじゃない！　歴史的事実として知っているだけだーー畑・林・半沢》

原爆を敵地へ運ぶには、まず小型化しなければならない。大きいままでは運ぶ手段が限られる。戦後、アメリカとソ連が原爆の小型化の競争をやった。それで、広島や長崎に落

とされたものの何十倍という爆発力のある原爆が、ずいぶん小さくなったという。弾丸にして大砲で撃ち込む、戦術核というものまでできている。しかしそれには、何十回という原爆実験をする必要があった。小型化は、だからけっこう難しい。北朝鮮が仮に一つか二つ原爆を作ったとしても、おそらく小型化には成功していないだろう、ということである。

小さくすれば、運びやすい。アメリカも初めはＢ29とかＢ52という巨大な戦略爆撃機に積んでいたが、このごろは小さな戦闘爆撃機に積めるようになった。航空母艦で敵国の近くまで持っていけばいいのである。原子力潜水艦の小さなミサイルにも付けることができる。アメリカからソ連へ、ソ連からアメリカへと直接撃ち込むことのできるのが、インター・コンチネンタル・ボム・ミサイル、いわゆるＩＣＢＭという奴で、アメリカもソ連も大量に装備した。冷戦が終わって、今その廃棄に苦労している。ざまあみろ。

北朝鮮には「労働１号」というミサイルがある。日本にもとどくと言われ、今にも北朝鮮が「労働１号」に原爆をつけて撃ち込んでくるような話をしていた政治家もいた。しかし、このミサイルに積み込めるほどの小型化は、まだ無理だろうということである。つまり、北朝鮮には、原始的な原爆をつくる能力はあったとしても、それを核兵器として活用する真の核武装の「能力」はないと思われる。この点については、故金日成主席の発言は真実だろう。

日本のほうはどうか。

まず、原料となるプルトニウムに関しては、昨年の１月、武装した海上保安庁の巡視船の護衛のもとに、「あかつき丸」がフランスから２トンものプルトニウムを運んできたし、これまでの原子力発電所の運転で、想像を絶する量のプルトニウムが生産されている。もっとも、商業用の原発でできるプルトニウムは純度が低くて（60％くらい）原爆には使えないと言われている。だから、アメリカでもソ連でも、原爆用のプルトニウムは専用の軍事用原子炉で生産した純度の高いプルトニウム（94％）を使ってきた。しかしアメリカは、1962年というから今から32年も前に、商業炉でできたプルトニウムを再処理して原爆を作り、爆発に成功していたという（1994・6・29日付朝日新聞）。だからできないわけではない。その上、この４月に臨界に達した高速増殖炉「もんじゅ」は、燃料以上にプルトニウムを生み出す「夢の原子炉」と呼ばれているが、ここで生産されるプルトニウムは純度が高く、すぐにでも原爆に使えるらしい。

この５月、おもしろい、といって喜んでいるわけにもいかないが、事件があった。茨城県東海村にある、動力炉・核燃料開発事業団、通称「動燃」のプルトニウム燃料工場で、生産工程の機械の中に、操業開始以来５年半の間に、70キロという大量のプルトニウムがこびりついていた、というのである。耳掻き一杯で百万人を殺せるという猛毒のプルトニウムを扱うにしては、あまりにもずさんな話だが、その上、８キロのプルトニウムで原爆１個できるから、これだけで９個分もある。

「いや、日本は核査察の優等生で、これも国際原子力機関（ＩＡＥＡ）に申告した。隠れて原爆用のプルトニウムを溜め込むことはしない」というのが、動燃の言い分だが、ＩＡＥＡによる査察はふつう、10～15％の誤差が出るという。70キロの10％は７キロだから、誤差の範囲で原爆１個作れることになる。つまり、原爆１個分のプルトニウムは隠せるわ

けである。もっとも、そんなケチなことをしなくても、日本には山ほどプルトニウムがあるのだから、ＩＡＥＡの目をかすめて原爆用のプルトニウムを隠すくらい、日本の高度な「技術」をもってすれば簡単なことだろう。

プルトニウムから原爆を作るのは、日本にとってなんでもない。日本には「東大生」がゴマンといるからである。また、日本は何でも小さくする技術に優れているから、原爆を小型化することくらい簡単だろう。いや、大きいままでも日本には、原爆を敵地に運ぶ手段はある。

この２月４日、宇宙開発事業団は「Ｈ２」型という、純国産の巨大な宇宙ロケットの打ち上げに成功した。この夏には、その２号機で２トンの人工衛星を打ち上げ、来年２月には衛星２個を同時に打ち上げるという。（この打ち上げは、珍しく失敗した。ロケットは上がったのだが、衛星がうまく軌道に乗らなかったらしい）　このＨ２ロケットの推力は世界一流と言っていい。衛星の代わりに原爆を載せ、ちょっと斜めに打ち上げたら、世界中とどかないところはない。まさにＩＣＢＭそのものである。ロケットの誘導も心配はいらない。アメリカが日本の誘導技術を欲しがっているくらい、日本の誘導技術はすぐれているのだから。

もっとも、Ｈ２ロケットの主動力は、液体燃料だそうである。液体燃料は普段から入れておくわけにはいかない。そこで打ち上げの日時が決まると、その十数時間前から入れることになっている。ＩＣＢＭは建て前上、原爆攻撃されたときの報復兵器だから、これでは間に合わない。先制攻撃には使えるが。だから、アメリカでもソ連でも、ＩＣＢＭのロケットはすべて固体燃料である。

１９９５年といえば来年のことだが、科学技術庁は、全長31・2メートル、直径2・5メートルという、「Ｈ２」ロケットよりは少し小さいが、やはり巨大な「Ｍ－５」ロケットの打ち上げを計画しているという（江畑『兵器と戦略』による）。これが成功すれば、たぶん成功するだろうが、いつでも打ち上げることのできるＩＣＢＭを、日本は持つことになる。それでもいいのですかね、田中真紀子科学技術庁長官。

「能力」という点に関しては、故金日成主席も羽田前首相も、正しいことを言っていたことになった。すなわち、運搬手段まで含めた能力は、北朝鮮にはないが日本にはある。その気になっても、北朝鮮は核武装できないが、日本はその気になれば、１、２年のうちに、世界有数の核武装国になれるのである。

では、「意志」のほうはどうだろうか。

能力は物質的なものだから、客観的に判定できるが、意志のほうは精神的なものだから、実証は難しい。金日成主席が本当に核武装の意志を持っていなかったかどうか、もう亡くなってしまったから判断のしようはない。後継の金正日氏にその意志があるのかどうか、まだ何にも言ってないから分からない。ただし、北朝鮮には核武装の能力がないことが分かったから、意志があってもすぐに心配することはない。

ところが、日本には核武装の能力がある。そこで、北朝鮮よりも日本の「意志」のほうが重大となる。わが日本には、ほんとうに核武装の意志はないのだろうか。

日本の一般国民に、そんな意志がほとんどないことは明白だろう。戦争と敗戦と、広島

・長崎の経験から、日本の民衆はいわゆる戦争アレルギー、核アレルギーを持っている。これは、日本が世界に誇るべき「病気」である。なんとも頼りない「近頃の学生」も、この「病気」だけは持っているらしい。もっとも彼らは、エライ人の言うことには極端に従順だから、エライ人が「核武装しよう」と言ったら、たちまち賛成しそうだが。

問題は、その日本のエライ人の「意志」である。

今年の六月、日本政府（このときはまだ羽田内閣だった）は、オランダ・ハーグにある国際司法裁判所に対して、「核兵器の使用は国際法上必ずしも違法とは言えない」と言う陳述書を提出しようとした。国際法のどこを探しても、核兵器の使用を禁じた条項はない、というのが、その理由である。これに対して、広島、長崎の市民と市長から、猛然と反論が起こった。法律に載っていないことくらい、国際司法裁判所ともあろうところが、知らないはずはない。だから、それについて、日本の見解はどうか、と聞いてきているのである。唯ひとつの核被曝国として、「核兵器は、大量無差別残虐兵器であり、国際法にないのなら、条項を作って禁止すべきだ」と返事するのが当然、というのが、広島、長崎の市民のみならず、多くの日本人の考えだろう。

今与党になっている社会党や、新党さきがけ、それに当時与党だった公明党からも反対が出て、政府はやっと、しぶしぶ「実定国際法に違反するとは言えない」という部分を削除することに同意した。だが、そこを削除しただけで、核兵器禁止を主張したわけではない

こんな明々白々なことを、なぜ政府はかくもしぶったのだろうか。

ひとつは、アメリカはじめ、核保有の５カ国が、すべて核兵器の国際的禁止に消極的なことである。冷戦が崩壊したいまでも、アメリカは核をおどしに使い、実際に使用することも、事情によってはためらっていない。中国は最近、また原爆実験を行なった。

核兵器は抑止力だと言われている。だが、抑止力というのは、使わないということではない。使わなければ、「抑止」の効力を持たないではないか。

イラクが毒ガスを使ったとき、アメリカはじめ先進諸国は、口を極めて非難した。その根拠は、毒ガスが残虐兵器として、国際法で禁止されているからである。核兵器もまた国際法で禁止されていたら、使えばイラク並みに非難され、事実上使えなくなる。それでも使うだろうが、少なくとも湾岸戦争のように、「正義の味方」の格好はしにくくなる。

核兵器の残虐性が毒ガス以下であるとは少々考えにくいが、なぜ毒ガスや細菌兵器が禁止され、核兵器は禁止されないのか。それは、核兵器は先進大国でなければ作れないが、毒ガスや細菌兵器は、小国でも作れるからである。小国で作れる兵器は禁止し、核兵器は禁止しないで、その威力で世界を支配しようという、まさに大国のエゴの象徴が核兵器である。

だが、日本が核兵器禁止の国際法に踏み切れないのは、どうやらアメリカへの気兼ねだけではないらしい。

日本政府、中でも外務省の悲願は、国連安保理常任理事国になることのようである。日本経済の行き詰まりが見えてきて、これまでの経済一辺倒的やり方ではどうにもならなくなったからだろう。アメリカは、その強大な軍事力を背景にして、世界のどこでも、何か

事が起こると、航空母艦やら海兵隊を持っていっておどかしている。あるいは、国連の中で、自分の言い分をごり押しに通す。それで何とか、アメリカの経済を持たせているのである。日本もアメリカ流でいかなければ経済が持たなくなってきたようで、そのためにはまず、国連安保理常任理事国に入らなければならない。

常任理事国の資格とは何か。現５カ国は、武器輸出の第１位から第５位までを占めており、そして、すべて核兵器所有国である。核拡散防止条約という国際条約があって、加盟した国の核兵器所有は禁止されているが、常任理事国だけは除外されている。つまり、常任理事国になれば、合法的に核兵器を持てるのである。逆に言えば、核兵器を持たない常任理事国など、鉄砲を持たない兵隊同様、にらみが効かないのである。

常任理事国になったときに、核兵器を持てなくなるようなことを言って、いまから自分の手を縛ることはない。これが、「核兵器の使用は国際法上違法とは言えない」という陳述書の真の意味であろう。

日本には、核兵器を持つ意志、少なくとも「潜在的」意志は確実にある。しかも、その能力をも充分に持っている。日本は、意思はあっても能力のない北朝鮮よりも、きわめて危険な国なのである。

こんな話を、学生にしてみた。

「そんなこと、ないでしょう」

「そんなこと、あるんや」

「ぼくは原爆なんか、持とうとは思いませんよ」

「君に持つ気はなくても、持つ気のある奴がおるんや」

「いないと思いますけどねえ」

私は、ふたたび教育意欲を失った。

「やっぱり『敵を知らず、己を知らず、百戦あやうし』やなあ」

「なんですか？」

「いや、こっちのことや」

ところが、この学生、あろうことか大学院に受かってしまったのである。私は仰天したが、彼はしごく当たり前のような顔をしている。

その顔を見ながら、私は自信を喪失した。

（ひょっとしたら、北朝鮮も核兵器を持ってるのかも知れんなあ）

【新聞記事から】

「金沢大学平和問題ネットワーク・ニュース」のために、新聞記事を切り抜いていると、ときどきおもしろい記事にあたることがある。その一つを紹介しておこう。

○　非武装“武器”に和平説得（1994・5・3日付朝日）

世界で最も厳格、といわれる憲法９条の「戦争放棄」。これに近い条文を持った国が中米にある。人口３百万余りの小国、コスタリカ。憲法第12条はこう定める。「軍備は、常設制度としては禁止される」。日本との違いは、実際に軍隊を持っていない点だ。「非武装」を逆手に、周辺の紛争多発国に和平を積極的に働きかけ、「国際貢献」している。／この憲法が制定されたのは1949年。大統領選をめぐって起きた内戦の反省などから生まれた。その後、何度も政権交代を繰り返しているが、非武装政策は基本的に貫かれている。／戦車はもちろん機関銃もない。第12条では自衛のための再軍備ができることも認めているが、行使されたことはない。地域的集団安全保障の傘下にいるせいもあるが、軍事費がかからない分、教育制度などの充実に力を注ぎ、教育費は国家予算の３割にも及ぶ。／コスタリカが注目を浴びたのは、中米紛争解決の契機となる87年の和平プラン提示だった。ニカラグアなど紛争、内戦の絶えない周辺諸国に対し、即時停戦などを働き掛け、中米５カ国による初めての和平合意に結びつけた。現地紙、ラ・ナシオンのロドリゲス記者は「非武装の実績があるから他の国に対し説得力があった」と語る。／82年には非武装、永世中立を宣言した。中米事情に詳しい寿里順平・早稲田大学教授は「当時は一国平和主義的な受け止め方もされたが、そうではないことをその後の和平提案など行動で示した」という。

○　軍廃止に誇り・コスタリカ元大統領に聞く（同上）

コスタリカで大統領（1986-90）を務めたオスカル・アリアス・サンチェスさん（53）は、憲法の理念に沿った積極的な外交活動で知られる。中米和平への努力を評価され、87年度のノーベル平和賞を受賞した元大統領に、聞いた。

――コスタリカが追い求めた国際貢献とは。

中米は紛争の多い地域だ。大統領になった時、その解決のために、コスタリカはもっと活発な役割を果たすべきだと思った。

――日本にもコスタリカ同様、平和憲法がある。

憲法第９条は知っている。ただ、日本は第９条があるにもかかわらず、ＧＮＰの約１％を軍事費に回しているとも聞いている。《耳が痛いね》

――日本ではＰＫＯ参加を巡って、憲法か、国際貢献かの議論が起きたが。

日本に「軍隊」があるのなら、それに応じた国際貢献は必要だろう。だが、私たちには軍隊がない。だから、国連協力で軍隊を送ることなんてできないんだ。《なるほど。恐れ入りました》

――国際貢献の仕方に、日本とコスタリカで違いがあるだろうか。

武力を使わず、外交で国際紛争を解決しようとしている点では、基本的に日本もコスタ

リカも一緒だ。日本は軍事費を増やしてはいけない。軍事費分を、発展途上国のために使えばいい。《異議なし！》

――コスタリカでは憲法改正の意見はないのか。

全くない。憲法を変えようとはだれも考えていない。私たちは、軍備を廃止したこの憲法に非常に誇りを持ち、満足している。《どこかの、「誇りを失った憲法改正論者」に聞かせてやりたいね》

《はずかしながら、この記事を読むまで、コスタリカがそんな憲法を持ち、しかも軍備を全廃しているとは知らなかった。偉い国だね。それにしても、1949年といえば、日本の平和憲法施行のたった２年後。45年間も、コスタリカは軍隊を持たずにがんばっているのである。それも、平和な地域ではない。コスタリカの北はニカラグア、南はパナマである。あと、グアテマラとかメキシコとか、争乱の絶えない国に囲まれ、おまけになにかいうとアメリカが乗り出してくるところである。アメリカは中央アメリカを「属国」並みにしか考えていない、その中米の真中に位置しているのがコスタリカなのである。まあ、軍隊がなく、したがって、ケンカといえばなぐりあいくらいしかできないから、内乱が起こらず、アメリカの付け入る隙がなかったせいだろう。これを見ても、軍隊なるものは「百害あって一利なし」という存在であることがわかる。軍隊とは、人を殺すために作られた組織である。人である限り、人を殺すことはいやがる。それをためらいなく人殺しさせるために、軍隊は徹底的に兵士を訓練する。「非人間」に仕立て上げるのである。アフリカの部族抗争でたくさんの人が殺されるのは、首狩り族の遺風だという説もあるが、断じてそうではない。近代的な軍隊で訓練した結果である。そうでなければ、「文明国」大日本帝国の軍隊が、南京でやった行為は、説明がつかないではないか。日本もコスタリカをお手本にして、自衛隊をなくそう》

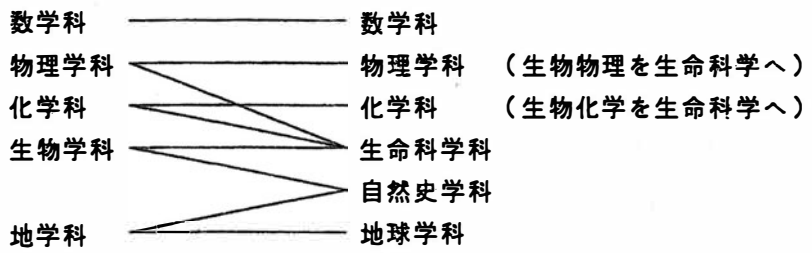
《編集局だより》

【その１】
会　長：おい、生物学科がなくなるぞ。
６局長：ほんとですか。
会　長：これ、見てみ。

「大学院拡充概算要求に向けてのＷＧ」議事に関する報告

大学・大学院の拡充改組の概算要求案の作成が進行してます。過去２年あまりの間、徐々に改組案の下書きが進行してきましたが、その進行は今年に入り加速度的に進まざるを得ない状況になってきました。最近開かれた全学委員会の将来計画検討委員会では、従来立案されてきた「新学部構想」は最終的に断念し、大学院の充実と高度化を目標と定めることが決まったとのことです。この線に沿って、学部教育等検討委員会のＷＧを改組・再編し「文系大学院拡充構想・学部改組・定員移行調整に関するＷＧ」と「理系大学院拡充構想・学部改組・定員移行調整に関するＷＧ」が設置されることになったようです。これを受けて、理学部でも学部・理学研究科・自然科学研究科の拡充改組案の作成を急ぐこととなりました。

理学部改組：過去２年間にわたり徐々に議論してきた案が煮詰まってきました。この骨子は、生物学科と地学科を基とした３学科への再編案です。その概要はおおむね次のとおりです。（名称は（案）です）



生命科学科　分子生理学講座　（教授３、助教授３、助手３）
　　生物情報学講座　（教授３、助教授３、助手３）
　　学生定員　２５、修士定員　１５
自然史学科　生物自然史講座　（教授３、助教授３、助手３）
　　地水圏自然史講座　（教授２、助教授３、助手２）
　　学生定員　２０、修士定員　１０
地球学科　地球物質計測講座　（教授３、助教授２、助手２）
　　地球物質進化講座　（教授２、助教授２、助手２）
　　学生定員　２０、修士定員　１０

改組の要点は次のとうりです。

○生物と地学を統合・３分割し３学科に再編し直すこと。
○この再編に伴って、物理学科、化学科からの自然科学研究科生命科学専攻への参加教

官を生命科学科に移行すること。
　○教養部理系教官の理学部全学科への参加を期待すること。
　○全学の定員移行調整に対応できること。

６局長：なんか、よくわかりませんね。ＷＧというの、なんですか、いったい。
会　長：ＷＣとちゃうで。ＷＧというのはな、ワーキング・グループの略や。この頃流行ってるんや。頭の委員会が何か決めるやろ。それを具体化するために、ただひたすら働く委員会のことや。身体が丈夫で口が達者やったら委員になれる。頭はいらんのや。みんな働きもので、よう働いてるで。
６局長：会長にはできませんね、その委員は。口は達者ですけど。
会　長：なんでや？
６局長：会長は、働くの、嫌いでしょう。
会　長：働くのは嫌いやないで。働かされるのは嫌いやけど。
６局長：働くのと働かされるのは、ちがうんですか？
会　長：大違いや。教官がテーマ出して研究させるのと、自分でテーマ見つけて研究するのとの違いや。
６局長：なるほど！
会　長：君は自分でテーマ決めて研究したんやろ。
６局長：そうです。
会　長：人間、自分で働く場合は、けっこうよくやるんやけど、君はあんまりやらなんだな。そういうのを、なまけもの、いうんや。
６局長：会長だって、はたらきもの、とは、あんまり思えませんけどね。
会　長：おれは、本性はたらきものやけど、無理してなまけものになってるんや。君はＤＮＡの段階でなまけものや。
６局長：ぼくは本性なまけものですか。
　（６局長の名誉のために言っておきますが、６局長が非常に熱心に研究していたことを証言します。会長が知らないだけですーー７局長）
会　長：それはともかくとして、まあ、働きものが集まって理学部を「改革」しようと、何年もかかってこしらえたのが、この案や。
６局長：政界も改革流行りですけど、なぜ理学部まで改革せんといかんのですか？
会　長：それはな。ほんというと、理学部が改革したいのは、大学院のほうなんや。まあ、改革とはいうてるけど、本当は、増設してほしいだけなんやけどな。政界といっしょで、数の論理しかないんや。
６局長：大学院をどうしようというんですか。
会　長：今、君のいる修士コースは、学部の各学科の上に積み上げになってるやろ。とこが、博士コースのほうは、薬学部といっしょになって、総合大学院になってる。その総合大学院へ修士コースもくっつけて、５年一貫教育にしようとしてるんや。
６局長：ここの先生に、５年も一貫して教育されたら、かなわんなあ。２年で音を上げた

のに。
会　長：言葉使いに注意しろよ。おれも「ここの先生」なんやから。
６局長：会長は別ですよ。だって、ぜんぜん教育してもらった覚えはないもの。
会　長：おれも君を教育した覚えはないよ。もっとも、５年一貫して立派な教育をさずけようと思ってる先生は、一人もいないから、安心しろ。
６局長：だったら、なぜそんなこと、するんですか。
会　長：そうしたら、文部省がよろこんで、予算つけてくれると思ってるんや。
６局長：なんだ。文部省のご機嫌とりですか。
会　長：その大学院を認めてもらうためには、学部のほうも改革せんならんというわけで、できたのがこの案や。
６局長：これも、ご機嫌とりなんですか。
（おっとりした６局長も、さすがにあきれる）
会　長：というても、各学科ともあんまり変えたくはない。そこで、いちばんなめられてる生物学科が犠牲にされて、二つに分割されることになったのや。
６局長：生物学科は、なめられてるんですか？
会　長：まあな。うちの教授を一人一人思い浮かべたら、なぜなめられてるか、わかるやろ。
６局長：なんとなくわかりますけど。でも、コメントは差し控えます。
会　長：そうや。君はまだ、修士もらってなかったな。まあ、それはいいとして。
６局長：よくないですよ。
会　長：この案を見たＦ助手が烈火のごとく怒り出してな。教授に、「こんな案を通すんだったら、私、なりふりかまわず反対しますからね」と宣言したらしいよ。
６局長：Ｆさんが!?　怖いなあ。
会　長：教授も怖かったと見えて、早速こんなお触れが回ってきた。この問題について、説明会を開くんだって。
６局長：（教授のお触れを見て）あれ、今日じゃないですか。午後３時といったら、もう始まりますよ。会長もいくんですか？
会　長：行くよ、もちろん。おれも怖いからなあ。
６局長：じゃ、行ってらっしゃぁい。
（その翌日・・・）
６局長：どうでした？　昨日の説明会。
会　長：（浮かぬ顔で）それがなあ、闘争勝利してしまったんや。
６局長：闘争勝利？　勝ったんですか！　やったぁ。
会　長：闘争勝利なんか、２０年ぶりやぞ。困ったもんや。
６局長：困ることないでしょう。勝ったんですから。
会　長：ぼくらが勝つと困るんや。負けてるほうが気楽でいいからな。
６局長：会長って、無責任やないかと思っていたんですけど、ほんとに無責任なんですね。
会　長：今頃わかったんか。ともかく、説明聞いて、Ｆさんが、「生物学をなくそうとす

るのか」と正面から攻撃してね。あまりにも正しい論陣を張るものだから、教授たちはものが言えなくなってしまった。あんまり気の毒だから、ぼくが応援に出てね。

６局長：会長が教授の応援に？

会　長：教授を助けるのが助教授の勤めやからなあ。

６局長：いったい、どんなこと言ったんですか。（６局長、心配そうな顔をする）

会　長：別に大したことを言ったわけやない。質問しただけや。

６局長：それが困るんやなあ、会長の質問は。

会　長：そんなことないで。例えばな、「生物学科を生命科学科と自然史学科の二つに分けるんですね？」「そうです」「生命科学というのは、ライフサイエンスの訳ですか？」「そうです」「英語のライフという言葉には、生命のほかに生活という意味もあると思いますが、ちがいますか？」「・・・」「生物の生活を扱うのが生態学ですから、ライフサイエンスには生態学も当然入るはずです。なぜ、生命学科からはずしたんですか？」「・・・」

６局長：応援やなくて、いじめじゃないですか、それじゃ。

会　長：まあ、ちょっと答えにくい質問であることは確かやね。

６局長：答えにくい質問なんてものじゃない。答えられん質問ですよ。

会　長：こんな質問もしたよ。「自然史学というのは、ナチュラルヒストリーの訳ですか」「そうです」「ナチュラルヒストリーが自然史だということは知っていますが、自然史学とは知りませんでした。ナチュラルヒストロジーということですか。それなら、歴史学ですね」「この名称は仮のものですから、変えてもいいのですよ。自然史学がおかしいというのなら、自然史にしてもよい」「自然史科ですか。『学』を放棄するわけですね」「今までにないような名前にすれば、文部省を通りやすいのです」「文部省に通してもらうために、学問に勝手な名前をつけるんですか。それは学問に対する冒涜（ぼうとく）というものではないですか」「・・・

６局長：ほんとにそんなこと言ったんですか。

会　長：言うたよ。ふだんおとなしくしてるから（「ウフッ」－６局長）、こんなときくらい、言わせてもらわんとな。

６局長：でも、ナチュラルヒストリーというのは、自然史であって自然史学ではないと言うのは、本当ですか？

会　長：後でちょっと気になってな、たまたま食堂で教養部の科学技術史の先生に会ったから確かめてみたんや。そしたら、ナチュラルヒストリーというものは、王候貴族の趣味みたいなもので、学問やないと保障してくれたよ。

６局長：ほんとかなあ？

会　長：専門家がそう言うんやから、信用しろよ。

６局長：専門家ほど信用できないものはない、と、会長、前に言ってたやないですか。

会　長：専門家にもいろいろあってな。信用できる専門家もいるんや。

（６局長、呆れて話題をもどす）

６局長：それで、結局どうなったんですか。

会　長：説明会はそのまま終わったけど、今朝聞いたら、あの原案、つぶれたんだって。
６局長：えっ？　ほんとにつぶれたんですか。２年もかけて、ねりあげた原案なんでしょう。
会　長：それくらいのことでおどろいていては、今の大学教官は勤まらんよ。この間も学部会である先生が、「どこでどんなことが決まっているのか、われわれにはさっぱりわからない。もっと情報を流してくれ」と言ったら、学部長が「私にもわからん。朝令暮改というが、この頃は夕方まで持たなくて、朝令昼改だ」と言ったくらいだからね。
６局長：会長の話聞いてると、なんだか大学は無茶苦茶みたいですね。
会　長：そのとおり。無茶苦茶だよ。生物の教授が相談して、生物学科分割案は取り下げて、生物と地学がいっしょになるという案を作って、今、地学科に申し入れているんだとさ。
６局長：そんな無茶な。それで、地学はどう言ったんですか？
会　長：それはまだ聞いてないけど、そんな案、承知するはずないやないか。
６局長：そうでしょうねえ。
（後日聞いたところでは、地学科が拒否し、結局元通り５学科案でおさまったらしい）
会　長：君もそろそろ、大学から逃げ出したほうがいいよ。こんなところに長いこといると、精神が退廃するよ。
６局長：言われなくても逃げ出すつもりですよ。

【その２】
（Ｓ先生が、会長の部屋へ遊びに来た）
Ｓ先生：なんや、君も来ていたのか。
６局長：ぼくは生物学会第６編集局長ですからね。会長と今、編集会議やってるんですよ。
Ｓ先生：生物学会誌に編集会議なんか、いらんのやろ。
６局長：なんだ、先生知ってたのですか。
Ｓ先生：こうみえても、ぼくは創立以来の会員だぞ。
６局長：そのわりに、論文載せてないですね。
Ｓ先生：まあ、そう言うな。だけど、君、この頃ずいぶん成長したな。なあ、会長。
会　長：そうや。この間まで、人柄がいいだけでどうしょうもない奴やったけど、このところ、めきめきしっかりしてきた。もう一人前やな。
６局長：何をさせようとしてるんかは知りませんけど、おだてには乗りませんよ。
Ｓ先生：何かさせようなんか、思ってないよ。させんとこうと思ってるんや。
６局長：え？
Ｓ先生：なあ、会長。この男、せっかくここまで成長したんやから、ここで卒業させるのは惜しいと思わんか。
会　長：実を言うと、おれもそう思ってるんや。せめてあと１年は残って、後輩の指導にあたってもらわんとな。

Ｓ先生：今彼がいなくなると、また教官にだまされて精神がおかしくなる学生が出てくるにちがいないしな。人助けと思って、君、もう１年残れよ。
６局長：そんな無茶な。ぼく、もう就職決まってるんですよ。
会　長：君の就職先のいちばん偉い人、ここの卒業生やから、ぼくから一言、言っておくよ。「もうちょっと訓練してから出すから、すまんが１年まってくれ」って。
Ｓ先生：そうや。あいつやったら、会長の言うこと、聞くはずや。なんでも、会長の娘と婚約していたのに、それを裏切って結婚した奴やからなあ。
６局長：勘弁してくださいよ。ぼく、ほんとに就職したいんですから。
会　長：二人でこれだけ言うてもだめか。われわれは、本人の意志を尊重する方針やけど、ここは実力行使に出な仕方ないか。なあ、Ｓさん。
Ｓ先生：そうや。やっぱり、忍耐にも限度というものがあるからな。
６局長：（心配そうに）実力行使って、何するんですか？
Ｓ先生：会長はな、君の修士論文の審査員の一人やで。
会　長：そうや。おれがハンコ押さなんだら、君は修士になれんのや。
６局長：・・・。
（こんな会長のもとにこれ以上いると、精神は退廃する前に崩壊してしまいます。みなさんも用心してください－６局長）

【その３】
（第６編集局長、会長のおどしに抗して、修士の学位を取得する）
会　長：次の編集局長、決めなあかんな。
６局長：別に、決めなくてもいいでしょう。
会　長：何でや？
６局長：ぼく、１年間やりましたけど、何にもしなかったもの。
会　長：そう言えばそうやったな。希にみるサボり局長や。
６局長：そんなことないでしょう。前の歴代局長も、何にもしてなかったんじゃないんですか。
会　長：そんなことはない。原稿集めにいってケーキご馳走になったり、編集後記書いたり。
６局長：聞きましたよ。本文ができないうちに、編集後記書かされた、言うてぶつぶつ言ってましたよ。
会　長：編集したのなら、編集後記は後から書けるけど、編集してないのやから、いつ書いてもいっしょやないか。
６局長：？
会　長：まあ、ともかく、第７編集局長を決めよう。誰か、人材はおらんかね。
６局長：ぼくが、決めるんですか？
会　長：何にもしなかった罰や。誰か推薦しろ。
６局長：可哀そうで、そんなことできません。

（そこへ、ある学生がはいってきた）

学　生：先生、コーヒー飲ませてください。

（会長、ニヤリと笑い、いそいそと立ってコーヒーをいれ、学生の前におく）

会　長：さあ、遠慮せずに、どうぞ。

学　生：いただきます。

６局長：おい、今日は飲まんほうがいいと思うよ。

学　生：（すでに一口含んで）なんでですか？

６局長：今日のコーヒー飲むと、ひどい目に合わされるよ。

学　生：また、薬でもはいってると言うんでしょう。そのくらい、知ってますよ。

６局長：それが、今日のは薬だけやないんや。

会　長：どうや。おいしいか。

学　生：ええ。

会　長：飲んだところで、相談やけど。

６局長：そら来た。

会　長：この第６編集局長の就職が決まってなあ。

学　生：ほんとですか。おめでとうございます。

会　長：それがおめでたくないんや。

学　生：どうしてですか？

会　長：編集局長がいなくなったら困るやろ。それでな、君、第７編集局長やれ。

学　生：えっ？　第７編集局長！

会　長：そうや。

学　生：そんなこと言われても。ぼく、この間、学会に入ったばかりで、何にも知らないのに。

会　長：何にも知らんでいいんや。何にもせんでいいんやから。

学　生：？

６局長：それはほんとや。こうして時々この部屋へ来て、会長の相手してたら、それで役目は果たせるんや。

会　長：そんなことないんやで。こいつだけや、それですませよったのは。

学　生：（心配そうに）何かするんですか？

会　長：編集局長やから、編集するんや。

学　生：ぼく、編集なんて、したことないですよ。

６局長：それは心配ないよ。集まってきた原稿を順番に並べるだけやから。

学　生：編集って、それでいいんですか。

会　長：それしか仕様がないやないか。

学　生：なぜですか。

６局長：会則にな、「投稿された原稿は、無審査、無修正の上、無責任に掲載する」と書いてあるんや。だから、並べるよりほかに、することないんや。

学　生：（もうひとつよく分からぬ顔で）それくらいだったら、できそうですけど。

会　長：よし、決まった。今日から君は第７編集局長や。
学　生：そんな・・・ちょっと考えさせてください。
会　長：生物学会は会長独裁やからなあ。「龍言汗の如し」という言葉、知ってるか。
学　生：知りません。
会　長：天子の言葉を龍言という。天子がいったん口から出した言葉は、汗みたいにもうもとへもどせない、ということや。
学　生：ぼくは、汗、ですか。
会　長：そうや。もう君を７局長に任命したから、取り消すわけにはいかんということや。
学　生：そんな・・・
（かくして無事、第７編集局長が誕生しました。気の毒に・・・－６局長）

【その４】
７局長：会長。今度、３年と１年の、複式授業をやるんですって。
会　長：そうや。金沢城にいたときはこんなことなかったんやけど、やっぱり角間の山奥へ来たら、授業まで複式になるみたいやな。
７局長：なんでそんなことになったんですか？
会　長：知らん。おれが決めたわけやない。どこかで勝手に決めよったんや。おれが３年前期でやってた「系統動物学」を、１年前期におろして、その上、講義の名前まで「自然史４」と変えてしまいよってな。今の２年と３年は３年になってから、「系統動物学」を聞く権利があるから、いっしょに複式でやれ、いうわけや。
７局長：ちょっと無茶ですね、それは。それで、会長、黙ってるんですか。
会　長：黙ってはおらんで。これ見てみ。
（机の上に山をなしている書類の中から、一枚の紙を取り出す。乱雑な割りにすぐ出てくるところが恐ろしい）

新カリキュラムへの疑問

1994年１月25日、新しいカリキュラム案を中村教務委員から提示されました。それによると、私の「系統動物学」が、火曜日二限目に移り、しかも１年生向けの「自然史４」と一緒になっています。今までと同じ講義をすればいいとのことですが、大きな疑問がありますので、次の質問に答えてください。

私の「系統動物学」は、３年生向けに20年かかって作り上げたものです。その講義を１年生にそのまま聞かせるわけにはいかないと、私は思いますが、大串教授はどう思われますか。

２　「系統動物学」を「自然史４」に変更し、３年から１年に下ろすというのが、私に関する今回のカリキュラム変更です。講義担当者に何の相談もなく、勝手にこのような変更ができるのでしょうか。

３　「系統動物学」を「自然史」にふくめた理由を説明してください。また、それを３年でなく１年の初めに講義する「教育的意義」も説明してください。

４　その上、このカリキュラムでは、１年生向けの「自然史４」と３年向けの「系統動物学」を同時に講義することになっています。少しでも学生教育のことを考えるものには、事実上不可能な講義となります。今では山奥の小学校にしか残っていない「複式学級」を、移行期とはいえ金沢大学が行なってもいいのでしょうか。
５　現在の１年生と２年生は、３年になって「系統動物学」を聞く権利があり、一方、新１年生は、新カリキュラムによって、「自然史４」を聞く権利があります。大学には、移行期の間、その両方を別々に開講する義務があると思いますが、いかがですか
１９９４年１月２７日

学　生：カッコいいですね、この文章。それで、何か返事あったんですか。
会　長：なしのつぶてや。
学　生：（ガックリ）それで、どうしたんですか。
会　長：どうもせんよ。
学　生：（もういちど、ガックリ）そしたら、複式授業、やるんですか。
会　長：やるよ。いちばん初めにしゃべること、もう決めたんや。
　　（会長、また一枚の紙を引っ張り出す。講義のノートらしい）

「実はこの講義、どういうわけか１年と３年の複式授業になってしまって、困っています。なぜ、困るかというと、１年と３年では『学力』がちがう。どちらの『学力』に合わせて講義したらいいかわからない。
ずっと前の話ですが、ある大学の英文科の先生が、大学入試の英語の問題とまったく同じ問題を、大学院の試験に出したのだそうです。そしたら、大学院の方が成績が悪かった。その先生は『お前ら、大学４年間、なに勉強してたんだ』と怒ったという話。英文科ですからね。先生が怒るのも無理はない。
まあ、英語にかかわらず、ほかの学科でも同じ傾向があります。つまり、大学というところは、学年の進行につれて、次第に「学力」が落ちてくるのです。ですから、１年生に合わせて講義すると、３年生はわからない。そこで、せっかく希望に燃えて大学へ入ってきた１年生の諸君には気の毒だけど、この講義は３年生に合わせて講義することにします。一年生諸君はもの足りないと思うけど、そういう事情なので、しばらく我慢して聞いてください」

７局長：こんなこと、ほんとに言うんですか？
会　長：言うよ。
７局長：大学へはいったとたん、こんなこと言われたら、１年生はショックですよ。
会　長：カリキュラムの変更で、３年でやってた専門科目を１年２年に下ろすことになってね。この間、Ｓ助教授が言われたそうだけど、とにかく初めにインパクトを与えるような講義をするよう、教授命令が出てるんや。これなら、少しはインパクトになるんじゃないかね。

７局長：インパクトの意味が、ちょっと違うと思うけどなあ。

（数日後）

７局長：複式授業、やったんですか。

会　長：やったよ。

７局長：あれ、言ったのですか。

会　長：言ったよ。

７局長：どうでした？　インパクトはありましたか？

会　長：あった、あった。１年生に大受けでね。３年生は怒ってたけど。

（困った先生です。ほんとに。－７局長）

【その５】

７局長：こんにちわ。

会　長：第７編集局長か。何しにきた？

７局長：別に用事はないんですけど。

会　長：そうか。では、コーヒーでもいれるか。

７局長：ぼくがいれましょうか。

会　長：ここでコーヒーいれて、おれに飲ませたら、弟子入りしたことになるんやぞ。その覚悟があったらいれてみい。

７局長：じゃ、やめた。

（会長は気軽に立ち上がってコーヒーをいれ始める。すると、ノックの音がして、若い男の子が一人、恐る恐る入ってきた）

学　生：あの、奥野先生ですか？

会　長：そうや。君は１年生か。

学　生：そうです。あの、「自然史４」の受講票、持ってきました。

会　長：そうか。その辺へおいといてくれ。

学　生：（困って）その辺って、どの辺ですか。

（これは会長のほうが悪い。会長の部屋ときたら、机の上には書類や本が積み重なり、至るところに段ボールの箱が散らかっていて、大事な受講票など置く場所なんかないのである－７局長独白）

会　長：その辺って、その辺や。まあ、もらっとこうか。

学　生：お願いします。

（ようやく会長に受け取ってもらった学生は、ほっとしたような顔をして、逃げるように部屋を出ていった）

会　長：やっぱり、１年生は可愛いな。３月まで高校生やったんやからな。

７局長：４年生になったら、可愛くないですか。

会　長：自分のこと、考えてみろよ。

７局長：まだ可愛いと思うけどな。

会　長：あつかましいことを言うな。

（コーヒーがはいって、飲もうとすると、またノックの音がした。今度は女子学生が３人も入ってきた）

学　生：あの、受講票持ってきました。

会　長：そうか。もらっとく。

（会長、立ち上がり、手をのばして受け取る）

会　長：ちょうどコーヒーいれたとこや。すわって飲んでいかんか。

（男と女で、扱いがぜんぜん違うなあ－７局長独白）

学　生：いいんですか、ほんとに。

会　長：いいよ。そこにコーヒー茶碗があるやろ。好きなの持って、そこらへ座ったらいい。ああ、こいつは４年生でなあ。しょっちゅうコーヒー飲みにきよるんや。

（女子学生３人は、コーヒーカップをもって、その辺にすわる）

会　長：金沢大学の感想はどうや。

学　生：遠いですね。

会　長：金沢城にいたときはよかったんやけど、山奥に引っ越したからなあ。

学　生：あの、先生は、どんなことなさってるんですか？

（会長、ぐっとつまる）

会　長：おい、７局長。君から説明してやれよ。

７局長：いや、ぼくもぜひ聞きたいですね。

会　長：君も無責任な奴やなあ。師匠が困ってるときは弟子が助けるもんやで。

７局長：でも、ぼく、まだ弟子入りしてませんよ。

会　長：そうか。今度は無理にでもコーヒーいれさせて、弟子にせなあかんな。

学　生：あの、コーヒーいれたら、弟子にしてもらえるのですか？

７局長：それだけはやめといた方がいいよ。この先生の弟子になんかなったら、大変なことになるからね。

学　生：（けげんそうな顔をして）大変って、何が大変なんですか？

７局長：一生出世ができなくなるんや。ぼくだって、まだ弟子入りはしてないもの。

学　生：？？？

会　長：１年生に偏向教育したらあかんぞ。と言っても、まあこいつの言うとおり、君らもあんまりこの部屋へ来んほうがええけどな。

（学生は、狐につままれたような顔をして、出ていった）

７局長：大学へはいったばかりなのに、あんまり変なこと教えたらだめですよ。

会　長：変なこと教えてるのは、君やないか。

（そこへまた、１年生の女子が２人、受講票を持って入ってきた）

会　長：（ご機嫌な顔をして）まあ、すわってコーヒー飲んでいけ。

学　生：いいんですか、ご馳走になっても。

会　長：ひとつだけ条件がある。「先生はどんな研究してるか」という質問だけはするなよ。

（７局長、思わず吹き出す）

学　生：？？
会　長：どうや。講義、わかるか。
学　生：わかるのもありますけど、数学なんか、ぜんぜんわかりません。何か、心配になってきて。
会　長：高校とちがって、大学の先生は不親切やからなあ。だいたい君らは、講義聞いてわからなんだら、自分が悪いと思ってるんやろ。
学　生：ハイ。
会　長：まあ、そんな場合もあるけど、たいていは先生のほうが悪いんやで。
学　生：え？
会　長：ほんとに自分がわかってたら、誰にでもわかるようにしゃべれるはずや。自分でわかってないから、聞いてもわからんのや。
学　生：ホントですか!?
会　長：ホントや。ぼくも教養部のとき、数学も物理も化学もわからんようになって、わかったのは生物だけやった。それが今は、大学の先生になって威張ってるんやから、心配せんでもいい。
学　生：そう言ってもらったら、ちょっと気が楽になったわ。何か、５月病というのがあるなんて、聞いてましたから。
会　長：あんまり悩むと、しまいに屋上から飛び降りたりするからな。悩まんほうがええ。
６局長：（あわてて）そんなこと言って、会長。学生は単位を取らんならんのですよ。
会　長：ああ、そうか。単位いうものがあったなあ。まあ、単位の取り方にもいろいろコツがあってなあ。そういうことは、ここにいる先輩に聞けば教えてくれる。
７局長：（もっとあわてて）そんなコツがあるのなら、ぼくが聞きたいですよ。
会　長：なんや、君はまだ単位そろってないのか。
７局長：たぶん大丈夫だと思うんですけど。でも、数えたこと、ないから。
会　長：４年生になって、こんなことにならんようにしとけよ。
学　生：ご馳走になりました。ありがとうございました。
会　長：帰るか。あんまり深刻にならんようにな。
学　生：はい。落ち込んだらまた来ます。
（学生、コーヒーカップをちゃんと洗って出ていく）
会　長：そら見ろ。やっぱり１年生は礼儀正しいな。
７局長：わかってますよ。それにひきかえ４年生は、と言いたいんでしょう。
会　長：わかってるんやったら、コーヒー茶碗くらい洗っていったらどうや。
７局長：それが、この部屋へはいると、ものを片づけるという気が、ぜんせんしなくなるんですね。彼女たちも４年生になったら、茶碗洗わなくなりますよ。
会　長：まあ、無理もないか。
７局長：それにしても、会長。１年生にあんな偏向教育してもいいんですか。
会　長：いいも悪いも、３年でやってた講義を１年でやれと決められたんやから、ぼくの責任やないよ。もう１０年くらい前の話やけど、教養部に頼まれて、理学部の学生

に一般生物学というのを講義したことがある。その前は法文系の学生に講義してたんやけどな。理学部へ変わってくれと言われて、いやや言うたんやけど、やらされてしまったのや。

７局長：なんで、理学部はいやなんですか。

会　長：教養でぼくの講義聞いた奴が、また理学部へ進学してきよるやろ。そんなたくさん、話すことないしな。法文の学生やったら、もう会わんですむ。

７局長：そんな、無責任な。

会　長：ところがな。１年やったら、今度は教育学部に変わってくれと言われてな。なんでも、生物科のある教授が、久しぶりに理学部を持ちたいと言うてきたんやそうな。

７局長：あっ。ひょっとしたら、会長を１年の講義から下ろすためですか？

会　長：そうや。君もなかなかよくわかるようになったな。あんな奴に１年生持たしたら大変や、いうことに気がついたんやな。

７局長：来年またカリキュラムが変わって、会長の講義、３年にもどったりして。

会　長：ありうるな、それ。

７局長：会長が１年生に話してること聞いたら、ぼくだってそう思いますよ。

会　長：あの連中が４年生になったとき、ぼくはもうおさらばやからなあ。責任持たんでいいんや。

７局長：１年生、可哀そう。

会　計　報　告

１９９３年４月～１９９４年３月

収　　入		
１００円会員	２人	２００円
１０００円会員	７５人	７５０００円
２０００円会員	１７人	３４０００円
計		１０９２００円
前年度繰り越し		２６０円
総計		１０９４６０円
支　　出		
再生紙	１００００枚×１・６円	１６０００円
表　紙	９００枚×３・６円	３２４０円
封　筒	７００枚×３円	２１００円
送　料	３２・３３・３４号	７５０００円
計		９６３４０円
差し引き残高		１３１２０円

【監査報告】

会計監査：１００円会員いうたら、学生のことでっか。

会　　長：大部分は学生ですけど、あと、主婦とか、定年退官した教授とかでんな。

会計監査：それにしては、成績悪おますな。

会　　長：１００円では、集める気、しまへんさかいな。

会計監査：いっそ、５００円か１０００円にしたらどないどす。最近、学生さん、金持ちやさかい。

会　　長：まあ、赤字になったら考えまひょか。

合　格（ハンコおすの、いやになってきた）

日本生物学会　会計監査　夢籍　忍次郎　印

「日本生物学会」　設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その一つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、“生物”には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、“日本”生物学会であるので、日本語以外は受つけない。受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。

第二の事業は、「大会」である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する。したがって、しゃべりたいものがいなければ直ちに解散する。（聞きたいものがいなくても同様である）　二次会はさまたげない。

会員の資格は“非教授”とする。要するに、教授以外であればだれでもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費をおさめること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定職についているもの年１０００円、定職なきもの年１００円とする。善意の寄付はこれをこばまない。ただし寄付しても、何の特典も与えない。

会の“管理・運営”は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権を持つ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内１の１　金沢大学理学部生物学教室　生態学第一研究室（現：金沢市角間町　２２３号室）におく。連絡はすべて本部あてにおこなうこと。

各地に支部を設立することが望ましい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は（あまりいるとは思わないが）、あるいは賛同しなくとも、同封のカードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部まで送られたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほどを。

１９７７年５月２６日の佳き日に

会　長　　奥　野　良　之　助

日本生物学会誌　第３５号
編集・発行　日本生物学会
金沢市角間町
金沢大学理学部生物学教室
２２３号室
編集無責任者　奥野良之助
振替　金沢４０７６３　日本生物学会
許可無断転載